267
282

特10
165

高山彦九郎

勤王名士

第一

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

44. 9. 30

さて本日より御所望に依り開講に及びまするは、近世無二の勤王家、高山彦九郎正之の實傳にございます、尤も先祖は新田左中將義貞の臣、高山遠江守より二十代の孫にして、家は代々百姓家でございまするが、世の普通の百姓とは異り代々帶刀御免の家柄で、殊に其の土地の豪家でございまして、處は野州新田郡細谷村と云ふ在所に住居を致し、田地田畑も數多ありまして、家には作男の十人も使つて居まする、夫れで當家の主人と

云ふのは、高山良左衛門と申しまして、至つて土地では評判の好い仁でございまして、御夫婦の中に二人の子を儲けまして、兩人とも男の子でありました、ところが此の良左衛門と云ふ人は、年齢三十に至つて、尚だ〳〵是れから盛んに進んで行かうと云ふ場合に、偶と病氣に取合はせて、僅かな病氣でございましたが、藥石効なく、遂に空しく病死を遂げましたのでございます、ですから妻は非常に心を痛めまして、所夫の病氣の際種々様々に介抱を致し、大きに是れも神經を痛めました事であります、其の年の秋に至つて是れも忠ひ付き、引續いて疾床に打臥す事になりましたが、遂に是れとても養生叶はずして、所夫々介抱を致しましたが、家の老母も非常に心配を致し、種の後を慕うて行つたやうな事でございます、さて斯うなつて見ると、高山の家は引續いて一年の間に、主人夫婦の者は亡くなつたのでございますから、家の取締りをする者もないやうな始末、ところが當家の此の良左衛門の母親をお元と申して、年齢は漸う五十七八ばかりでございまするが、中々壯健な方でございます、だから萬事此の人が家の取締りをして、高山の宅を引受けて居られるのでございます、尤も此のお元と云ふ方の良人は尚だ存命でありますが、餘程年齢を取つて在らつしやいまする、何しろ子息の良左衛門の存命中に早くから此の老人は世をお讓りに相成りまして、御自身は其の後裏の離れ座敷に在つて隱居の身上でございます、其の時から最う世の中の事は全然棄てて、丁ひまして、其の身は唯歌俳諧などに心を寄せ、四時斯やうな事を以て樂みと致して在らつしやいます、ですから追々其の道に心を寄せるところの手蹟が、集まるやうな事になりまして、家事向きの事は一切無頓着でございます、お祖母さまも大きに困つて居りまするが、何彼に就て老人に相談を致しまするとき、

老父「私は知らぬ、一旦私は悴に世を讓つたのである、最う是れ

で私の役目は済んで居る、長左衛門が死んだからと云つても夫れは運命と諦める外仕方がない、後は孫の兩人も彼あして居る事、依つて孫に家督を譲り、お前と長藏と兩人で後見をして遣れば宜いではないか」と云ふのでこしも家事には關係を致しません、さて此の長藏と云ふ者は、是れは矢張り當家から出ましたる主人良左衛門の弟でございまして、兄の存命中一旦他に分家をされまして、劍持と云ふ母方の苗字を繼ぎまして、今では細谷村と少し離れました、伊勢崎と云ふ處に住居を仕まして劍持長藏として郷士の一人、是れも世を樂々くと送つて居ります、夫れですから兄弟の孫のうち、兄の專藏に對して家督を繼がせると云ふ事に相成つたのでございます、然うして見ると此の劍持は叔父に當りますから、是れが折々來つて萬事家事向きに就て、後見を致しますのでございます、兩親共に今尚存命をして居られるところから、長藏は如才なく折々當家を見廻るので

ございます、だが家事向きは重に此の老婆のお元と云ふのが、萬事取締つてやつて居るのでございます、同じ兩人の孫のうちでも、身躰を生み落しても、人間の精神と云ふものは、何うも自由になるものではない、弟の彦九郎は兄とはガラリと其の性格が違ふのでございます、彦九郎の方は將來は分家をさせまして、當家の財産の幾分を分け與へ、別に之れを立てさせやうと云ふ考へ、然るに兄の專藏は一生懸命になつて、百姓の家に生れたのでありますから、他くまでも田畑を耕す事に心を寄せまして、父から受け繼いだ此の財産をなくさぬやうにせんければならぬと云ふので、至つて儉しい質でございます、彦九郎の方は中々此の當家に何時までも居ると云ふやうな考へはない、また農業は至つて嫌ひで、願はくば武家になりたいと云ふ考へ、子供の時分から手習ひ讀み書きを致しまして、其方は至つて好きでございます、遂にお祖母さんや叔父さんにお願ひ申して、

十二の年齢から叔父の劍持長藏の周旋に依つて、伊勢崎に松本先生と云ふ其の頃ほひ儒者の先生がありました、其方へ入門を致して、頻りに稽古を致すのを樂みとして、日々此の松本先生の方へ通學をするのでございます、夫れも近い處なれば宜しいが、此の細谷のお宅から伊勢崎の先生の許まで通ひまして、お稽古が濟むと自分の宅まで歸つて來るのですが、往復は五里ほども里程があるのでございます、夫れを雨が降らうが風が吹かうが更に當人は頓着はない、決して現今とは異つて日曜などの休日があると云ふではなし、何のやうな日であつても休むと云ふ事はない、何んでも立派な學者になつて、乃公は世に名を揚げたいと云ふ、子供の時分から氣象が激しうございますから、兄とは常に意氣が投合ません、けれども叔父さんの長藏は是も矢張り、彦九郎と同じ意見でありまして、子供の時分から農業を嫌ひ、何方かと云ふと學問の方を好みまする、此の人も隨分出來る仁であります、夫れですから同じ本家の兄弟の子息の中でも、弟の彦九郎とは至つて意氣が投合まする、折々は彼れを勵まして長藏「何んでもお前は今のうちに十分勉強をして、天晴れ天下に名を揚げ、御先祖高山遠江守樣のお名前を汚すやうな事をして呉れてはならぬぞ、御先祖は勤王無二の忠臣と云はれ、新田義貞公の御家來の中で、十六將の一人と云はれ、遂に主人と共に討死をなされたお方である、お前も何んでも成人をしたら恐れ多い事だがお天子樣の御爲めに誠忠を盡し、朝廷へ御奉公をして呉れんければならぬのである、此邊のところを忘れてはならぬぞ」と、尚だ七八歲の子供の時分から、彦九郎に此の事を云ひ聞かせまする、夫れですから子供ながらも彦九郎は是れが腦髓に染み込んであります、依つて唯一心に勉強を致しまして、伊勢崎の松本先生の門弟の中でも、チョッと彦九郎一人だけは別物であります、追々學問が進むに從ひ、宅に居り

ましても到底も兄さんとは意氣が投合ません、兄さんの方は讀み書き學問と云ふ方は好みません、乃公は細谷村では第一の豪家と云はれたる、高山の家を繼いだのであるから、何んでも親父より受けたる身代を減らしては相成らぬ隣家の者にも、專藏さんの世となつて彼のやうに益々盛んになつたと、世人に擧められるやうにせんければならぬ、夫れで高山家は專藏の代となつてから、追々身代が減つて來たと云ふやうな事を云はれて見れば、第一御先祖樣へ對して相濟まぬ、乃公は確乎り農業を勵まねばならぬ、何うしても頭が柔弱なれば、作男までも共々に意ける、依つて何んでも乃公が先きに立つて働いて遣らうと云ふ、斯かる氣象の專藏でございますから、朝は夜のうちから起きまして、唯最う一心に野の仕事ばかりに心を寄せて居ります、夫れですから弟の方は全然作男同樣に働いて居るのであります、伊勢崎の方へ讀書の稽古は夜が更けるからツと朝は遲くなる、

に參つて、段々進むに從つて、兄上は頻に觸つてならぬ「エ、弟の馬鹿者奴が、仕やうのない奴だ、百姓が讀書や學問をして何の役に立つ、第一叔父樣やお祖母さまが惡い、許して遣るから可けないのだ、子供の癖に氣位ひばかり高くなりやアがつて宅の間にはチョッとも合やア仕ない、偶に宅に居たつて本ばかり讀みやアがつて、幾ら乃公の宅の身代が宜いからと云つて、今乃公が家督をして見れば乃公の身代だ、何れは宅の冷飯食ひだ、些とは兄の手傳ひを仕たら宜いのだ、割當り奴が、叔父樣やお祖母さまも、何うかすると弟の方ばかり贔負にする、夫れゆゑ段々彦九郎奴が增長をして、唯蔓々と遊んで在やアがる、彼奴に乃公の物を食ひ倒されて居て堪るものか」と、常に思つて居ります、折々には專藏「お祖母さん、些とはまたお前さんも彼れに異見をして、農業の方を手傳ふやうにさせて下さい」云はれて見るとお祖母さんも「成程、專藏の怒るのも無理はな

い、併し彦九郎にして見れば、到底も此の家の相續をして行くと云ふのではない、其身は望みがあると見ねて腦んで稽古をして居る、また彼れは先祖の氣象を受け繼いで、世に名前を揚げたいと云ふ精神であるから、是れも無理はない」と思ひまして

祖母「マア〳〵私が彦九郎に異見を仕ますから、お前は相變らず作男を連れて行つて、野の仕事をしてお呉れ」と宥めて野へ出す其後にて徐々

祖母「なア彦九郎、長の日にお前は然うして本ばかり讀んで居るの」

彦九「ハイ、夫れは私しも斯うやつて兄さんの厄退屈であらう、お前も孫なら專藏も孫、何方も私は可愛いのである、專藏は唯此の家を大切に働いて居るのであるが、彼れが受け繼いだ身代として見れば、其の身代を減らさぬやうにと云つて、彼アやつて働いて居るのぢや、依つてお前も折々兄さんの氣に適るやうに、鋤鍬を擔いで農業の手傳ひをしてお呉れ

彦九「ハイ、夫れは私しも斯うやつて兄さんの厄介になつて居るのですから、決して異論があると云ふ譯ではあ

りません、夫れでは私しは兄上の氣に適るやうに働きに出ませう

祖母「然うして兄弟中好く行つて呉れゝば、夫れほど悦ばしい事はないのであるから

彦九「けれどもねねお祖母さん、兄上は宅を大切だ〳〵と云ひますけれども、何れ將來は私しは此の宅を出て行く身上でございます、農業などの事は私は毫しも介意はぬ、人間たる者は朝廷の御恩を思はぬやうな事では、人間ではないのでございます、況して先祖は勤王家にして、主人と共に天晴れな討死を致して、其の譽れをお遺しなされた、高山遠江守樣の血筋を引いたる此の彦九郎でございます、兄は兎も角も切めて私しは舍弟の事ですから、何處へ出て行つても構ひますまい、天下に名を揚げやうと云ふ丁簡であるのです、然うして見れば、今のうちに學問を何んでも十分になして置かねば、天下の志士とは云はれません、天朝に誠忠を盡して名を後の世まで遺したいと云ふのが、私しの本心、夫れに兄上のやうに怒ら

れて見ると、甚だ困るのでございます　祖母「解つて居る、お前の云ふ事も無理はない、けれども中に立つた柱で、斯うして宅に居る間と云ふものは、兄に從はぬければなりません、況して此家に生れたお前とは云へども、斯く兄の厄介になつて居るうちは、野仕事の方も少しは手傳つて呉れんければ、甚だ宅が圍く納まらぬからな　彦九「イヤ、解つて居ります、ぢやア今日は出掛けませう、お祖母さんに御心配を掛けるのも宜しくありません　專藏「コレ〳〵、彦九郎、お前が畑へ出掛けて參りました、併し片手に鍬を持つて居りますが、片手には何時も本を放しません、歩きながらも本を讀んで、道に凹凸があつても氣が付かぬやうな有樣でございます、兄の專藏は之れを見て呆れて了つた　專藏「邪魔になるから、最う可い〳〵、宅へ歸つて精出して讀書を仕なさい」と、可怖い顔をして睨み付

けました　彦九「イエ、兄さん、ッと習つたところを忘れてはならぬと思ひ復習て居りましたが、ぢやア今日はお手傳ひをせんでも宜しうございますか　專藏「邪魔になる、宅へ歸つて居ろ　彦九「左樣ですか、ぢやア然うさして頂きます、私も其方が大きに勝手ですから」暢氣な人間もあるもので、オッと任せて、また鍬を擔いでブラ〳〵宅へ戻つて參りました、表から這入つて參りますると、お祖母さんは臺所で頻りに糸紡ぎをして居りましたが　祖母「オヽ彦九郎、お前歸つたのか、何か忘れものでもあつたのかね　彦九「イエ、別に何も忘れやア仕ませんがね、私の野仕事は兄上の氣に適らぬのです、お手傳ひを仕ようと思つて參りましたら、お前が畑へ來ると却つて仕事の邪魔になるから、宅へ歸つて讀書の稽古をして居ろと、斯樣に云はれましたから、夫れで歸つて參りました　祖母「其樣な事を專藏は云ひさうな事はないが、お前は何かまた兄と爭論でもしたのではない

かね　彦九「イエ、何も兄さんに口答へをした事はありません　祖母「兄に歸れと云はれて、お前は何んと云つたのだね　彦九「何んとも云ひません、其樣なら然うさして頂きます、私しは其方が勝手でございまするからと云つて歸りました　祖母「困つた人だね、お前は決して兄と爭ひなどをしてはなりませんよ　彦九「イヱ、ナニ爭ひを仕たのちやアありません、今日は兄さんのお言葉に從つて歸つて來たのですから　祖母「マア何うも仕方がない、專藏が歸つたら宜いやうに云つて置くから、ちやア本を讀んでお在で、大い　彦九「有難うございます」自分の好きなのは讀書ですから、大いに悅んで、早々く物置に鍬を納つて足を洗ひまするとと、玄關の方へやつて參りました、ところが茲は南受けでございまして、至つて日當りの宜い物靜かな處でございます、玄關の障子を開けまして、彦九郎は夫れへ坐りましたが　彦九「ア、結構だ、是れからは乃公の世界だ」と云ひながら、懷中から靑表紙を一冊取出

しまして、何しろ自分の好きな事をやるのですから、莞爾笑ひながら、其の本を擴げて讀んで居ります、夫れは何かと云ふと太平記の中の十の卷、之れを徐々讀書を始めました、初めのうちは默つて本を見て居りましたが、追々夢中になつて來まして徐々大聲を揚げ出した　彦九「斯かりける處に、新田太郎義貞、去ぬる三月十一日、先朝より綸旨を賜りたりたりしかば、千劒破より虛病して本國へ歸り、便宜の一族達を潛かに集めて、謀叛の計略をぞ廻らされける、斯かる企てありとは思ひも寄らず、相摸入道舍弟の四郎左近太夫入道に、十萬餘騎を差副へて京都に上せ、幾內西國の亂を鎭むべしとて、武藏、上野、安房、上總、常陸、下野、六ケ國の勢をぞ催されける、その兵粮のためにとて、近國の庄園に臨時の夫役をかけられけり、中にも新田庄世良田には、有德の者多しとて、出雲介親連、黑沼彦四郎入道を使にて、六萬貫を五日が內に沙汰すべしと、堅く下知せら

れければ、使まづ彼所に從みて、大勢を庄屋に放し入れて、讀書する事法に過ぎたり、新田義貞是れを聞き給ひて、我館の邊を雑人の馬の蹄にかけさせつる事こそ、返すがへすも無念なれ、いかでか見ながら悒ゆべきとて、數多の人數を差向けられて、兩使を忽ち生捕りて、出雲介をば誡め置き、黒沼入道をば頸を切りて、同日の暮ほどに、世良田の中にぞかけられたり」彦九郎は全然夢中になつて、大きな聲をして讀んで居りまする、ところへ對して門内へ這入つて來たのは、彼の叔父の劍持長藏でございます、今日しも老父の機嫌を伺はんと、態々やつて參りました、ところが彦九郎は一心に本の方ばかりを讀んで居りますから、叔父の來たのも一向氣が付きませんものと見ねて、頻りに本と睨み合をして居ります、劍持は之れを眺めまして「アまた彦九郎は例の讀書か、勇ましい奴だ」と、長藏も好きな道ですから、彼れの氣の附きませんのを幸ひ、玄關の式臺に上がつて、案内もなく其處へ平倒つて、彦九郎が本を讀んで居る側で聞いて居ります、が更に彦九郎は氣が付かずに居りまする、

彦九「相模入道此事を聞きて、大いに怒り宣ひけるは、當家執世已に九代、海内悉く其命に從はず、近國常に下知を輕んずる事奇代遠境良もすれば武命に從はず と云ふ事更に無し、然るに近怪なり、剰さへ藩屏の中にして、奥節を誅戮する條、罪科輕きにあらざるに、此時若し緩々の沙汰を致さば、大逆の基となりぬべしとて、則ち武藏上野兩國の勢に仰せて、新田太郎義貞、舍弟脇屋次郎義助を討ちて進らすべしとぞ下知せられける、義貞これを聞きて、宗徒の一族達を集めて、此事如何あるべきと評定ありけるに、異議區々にして一定ならず、或ひは沼田の庄を要害にして、利根川を前に當て、敵を待たせんと云ふ儀もあり、又越後國には、大略當家の一族充滿なれば……」

長藏「コレ、彦や、お前は大きな聲をして相變らず讀書かな」と、突然に聲

を掛けましたから、ハッと驚いて氣が付いて見ると、叔父さんが前に佇つて居りますから　彦九「オヽ是れは叔父さんでございまするか、能く入らつしやいました」云ひつゝ本を下に置いて莞爾ひまする、長藏は手に佩刀を提げたまゝ　長藏「今日は好い天氣ぢや、此のお天氣にお前は野仕事を手傳はずして、相變らず勉強の方であるな、何の本を讀んで居なさる　彦九「ハイ、太平記でございます」長藏は莞爾笑ひながら　長藏「ムヽウ、私も太平記は好きで度々讀む、夫れは何の邊であるな　彦九「ハイ、今は第十卷の新田義貞の謀叛のところを讀んで居ります　長藏「夫れは面白い、興味のあるところだ、新田殿は當家の御先祖高山遠江守樣の御主君ぢや、其の次を讀んで聞かして呉れぬか」一段氣な人もあるものでございまして、夫れへ坐り込んで了つた、彦九郎はオッと來たりで、再び本を手に取上げまして　彦九「又越後國には、大略當家の一族充滿たれば、津張郡へ打ち越ねて、上田山

を伐り塞ぎ、勢ひを付けてや防ぐべきと、意見定まらざりける弓矢の道、死を輕んじて名を重んずるを以て義とせり」彦九郎は俯向いて考へ出した、劍持は沈と彦九郎の容子を見て居りましたが、また讀み出した　彦九「死を輕んじて名を重んずるを以て義とせり、弓矢の道、死を輕んじて名を重んずるを以て義とせり……ムヽウ、ねね、叔父さん、武士の用意と云ふものは茲ですねね、武士も百姓も約りは同じ事でございまするな、縱ひ百姓の家に生れましても、行ふところは武士の心掛けを以て守つて行かぬけれだ、忠義の道は千歲の後までも輝かす事は出來ぬのでする」劍持は少時の間彦九郎の顏を眺めて居りましたが、之れを普通の百姓が聞いたら、生意氣な奴もあればあるものだと、半々意氣も合ひますまいが、十三の小兒の言葉とは思はれません、長藏は彦九郎の言葉を聞き、少時考へて居りましたが

長藏「然うぢや、其方の申す通りぢや、百姓でも武士でも同じ日本に生れたる者は、恐れ多くもお天子様の民ならざる者はないのぢや、況して當家は高山遠江守の血統である、先祖の遠江守様は新田義貞公の十六將の一人と云はれて、主家沒落の後は民間に下つて、家は代々苗字帶刀を免されてある、縱ひ鋤鍬を肩に擔いで居るにもせよ、魂は武士ぢや、然も主と共に尊王の志を持つた武士ぢや」之れを聞いた彦九郎は、思はず知らず叔父の前へ進み出でました

彦九「叔父さん、夫れでは此の家は譽れある家柄でどざいまするか、して見れば我々に至るまで、其家の血を受けたる者ですから、家の名の汚れるやうな事をしてはなりませんねね

長藏「夫れは貴様の云ふ通り、貴様は其邊のところは分つて居るであらう、家の名を落さず、先祖の名を辱しめず何んでも他に優れた人間とならんければならぬぞ、傳來の田地とかまた家財とかを持つて、之れを相續して後を繼いで行くの

は、誰でも出來る、だが眞の孝道を盡さうと思へば、先祖の名を揚げると云ふ事を守らんけんばならぬのぢや、眞の忠義を盡くさんと思へば、眞の道を行ふにあるのぢや、此の事を能く合點が參つたら、何んでも身に學問を勵むやうに仕ろ、さもないと學問をした甲斐がない、縱ひ正宗の名刀でも持つたばかりでは決して燗くものではない、何ほどの書物を手に入れでも、唯讀んだばかりでは何んにもならぬ、能く心を籠めて讀まねばならぬ

彦九「ハイ、有難うございます、私しは能く其邊は心得て居ります、夫れで宅の御先祖様は勤王家の中でも、餘程苦心をなされたお方ださうでございますなの中にもあるではないか、入間河の合戰の時、首級を三個までお上げなさつて、御大將義貞朝臣の御褒美に預かられた事がある、夫れは麗々くと系圖の上に記されてある、貴様の讀んで居る中に、笠懸野と云ふ處があつたらう、生品明神の御前に旗を擧

げて、綸旨を頂いて三度之れを拜して、笠置野へ打つて出でられると云ふ事が書いてあるだらう、貴様生品明神を知つて居るか

彦九「ハイ、存じて居ります」

長蔵「書物は唯讀むばかりでは何んにもならぬ、第一は條目々々の字義を能く明きらめるのぢや、夫れで第二には能く文字の處へ心を付けるのぢや、第三には文中に現はれたる英雄豪傑の跡を吊ひ、また地理風俗を調べるのが肝心である、然うして讀んで行く上に、自と其の興味が分るさもなければ縱ひ千卷の本を讀んでも何んにもならぬのぢや、

彦九「有難うございます、彼の生品明神と申しまするのは、阿父様のお供を致しまして、私しは參詣を致しました、其時新田朝臣が此處で綸旨を披いて、義軍の御旗をお擧げなさつたと云ふ事を承まはりましたが、私しは身躰が堅うなるやうに覺ねました、其の事は叔父さん今尚に忘れません

長蔵「ムヽウ、其の志しを忘れてはならぬ」

彦九郎は兩眼を開き少時は本を眺めて居りましたが、其の兩眼には自と涙が溜つて居ります、此の有様を長蔵は熟と眺めて居りましたが、彦九郎の前に進み

長蔵「何うぢや、彦九郎、解つたか、殊に汝は義貞朝臣十六將の隨一と聞いたる、高山遠江守二十代の後胤であるぞ、義貞僅か百五十騎の一族郎黨を引き連れて、北條勢の數萬の敵に當られ、眞先きに御奉公なされた、勤王無二の新田殿御家來である、御先祖は時世を歎かせられ、弓矢を棄て、民間に落ちたまひしも、勤王正義の血は絶ゆる事なく、子々孫々に傳はつて居る、夫れで二十代四百餘年の長の間、細谷の里に埋れて、有る甲斐もなく世を送つても、先祖の誠は炳かに天に輝くのぢや、日月の光り赫灼として遍く照らしたまふ間は、當家先祖の心は絶ねぬのぢや、新田殿勤王の魂は決して絶ねぬぞ、彦九郎、貴様は當家の次男ぢやが、兄の專藏は家を繼いだが、貴様は何を繼いで行くのぢや」何んと返答するかと思ひ顏を見て居りましたが、彦九郎は

叔父の言葉を聞き、少時差俯いて考へて居りましたが　彦九「叔父さん、私しは魂を繼ぎます　長藏「ムヽウ、其の魂を繼ぐと云ふのは、彼の御先祖様の魂を繼ぐと云ふ了簡であるか　彦九「左様でございます、家名は兄上がお繼ぎになります、私しは御先祖の魂を繼いで名を揚げたいのであります　長藏「ムヽウ、能く申した、併し彦九郎、口先きでは誰も云ふ事であるが、眞の道を行つて行かんければならぬぞ、貴様は確かに行うて行けるか　彦九「叔父さん、私しは壯健な身躰で筋肉も段々附いて參ります、兩親より斯やうな壯健な身躰に生み付けて貰ひましたのですから、此の身躰を以て繼いで參ります」長藏は思はず膝を打つた　長藏「オヽ、健氣な者ぢや、遠江の寺様お亡れなされて二十代の後、其の志ざしを繼ぐべき者が生れ出でたか、其の強悟を決して忘れてはならぬぞ　彦九「ハイ、承知いたしました、天道様、御照覽なさいます」長藏は大いに悅びまして、頻りに大きな聲を出して、玄關先きで話を致し居りますると、お祖母さんは此の聲を聞き付けて、奥室から出掛けて參りました　祖母「オヽ長藏や、お前來たのかね　長藏「ハイ、今日は結構なお天氣で、阿母さまの御機嫌の躰を拜しまして、お父上は　祖母「アヽ奥室に在らつしやる　長藏「左様ならチョッとお目通りを願ひたい」と、其儘父の機嫌を伺ひに參りました、總て一家の家庭が斯う云ふ有様でございます、唯彦九郎と意氣の投合のは、叔父の劔持長藏のみであります、追々此の小兒が器量を現はすと云ふお話と相成りまするが、チョッと一息いたして伺ひまする、

第二回

そこで其日は長藏は離れ座敷へ參りまして、老父の機嫌を伺ひ四方山の話を致して、暇を告げて歸りました、此の隱居は今は良翁と名を改めまして、家事などの事は全然棄て、お了ひなさ

つて、唯専ら好きの道を樂んで遊んで居られますから、長藏も來ると他の事は云ひませんッと老父の氣に適る事を云つては機嫌を取り、また阿母さんにば家庭上の事に就て、折々は相談を仕ますが、弟の彦九郎の方は餘り慮めて遣らぬが宜しうございますとある、お祖母さんも何方かと云ふと、弟の方が可愛いのでございますから、矢張り其の氣になつて居られまする、されば彦九郎は斯やうな尻押が出來たのですから、大きに悅んで居ります、さて其後は兄の事藏が幾ら小言を云つても、勝手に云つて居れと云ふやうな風で、毫しも頓着は致しません、日々伊勢崎の方へ參つて、松本先生のお宅へ通つて學問の稽古をするのが、何よりの樂みとして居ります、ところが或日の事でした、此の松本先生の許に今日も講義がありますから、兄さんに斷つて彦九郎は之れを聞かんと、早くから宅を出ましたが、ッと何かと手間取りまして、其の日の夕景に相成りました、講義も果てまして、先生の許を暇を告げ、同じ伊勢崎の内に叔父が住居をして居りますから、最う大分道が暗くなつて來ましたので、提燈を借りやうと云ふので、態々叔父さんの宅へ立寄りまして

彦九「叔父さん、お在宅ですか

長藏「オ、彦九郎、マア此方へ上れ、今頃何しに來たのだ

彦九「今御講義が果てまして、是れから歸るのですが、大分道が暗うございます、濟みませんが、提燈を持つて參りませんでしたので、チョッと何うかお貸しなさつて

長藏「ア、宜い〳〵、私の此の小田原提燈を貸して遣らうまた便宜があつたら屆けて呉れい

彦九「ハイ、宅へ何か用事はございませんか

長藏「イヤ、別に何も用事はない、歸つたらお祖父さんにもお祖母さんにも、宜しく云つて置いて呉れ、道を氣を附けて行け

彦九「有難うございます」提燈を一張借り受けまして、是れへ燈火を點けまして

彦九「ちやア叔父さん、お暇を致します、左樣なれば」と、其儘表へ出まするとドシ〳〵道を急

ぎまして、恰度二三丁やつて參りますると、此の伊勢崎の驛の外れの横手にチョッとした森がございます、其の内方よりは山手の方へ通ひまする細道が付いてあります、中々茲を通り抜けやうとするには、餘程勝手を知つて居りまする者でなければ、暗くつて分りません、ところが今山の方から下りて參りましたのは、年頃五十四五の老爺、山賤と見ねまして、背中に澤山柴を背負ひ、今此の細道を街道の方へ出掛けて參りました、伊勢崎の方から提燈を提げて參りました彦九郎と、曲り角の處でピッタリ出會ひました、彦九郎は何の氣も付きませんから、行き過ぎやうとすると、老爺は頻りに高山の顔を眺めまして　老爺「アヽモシ〳〵、チョッと失禮ながら失れへお出でに相成りまするのは、高山の若旦那樣ではございませんか」彦九郎は不思議な顔を致しまして佇止まつて振り返り　彦九「左樣ぢや、乃公は彦九郎と云ふ者だが、お前は誰だ　老爺「イヤ、矢張り私の思つた通り

高山の若旦那樣でございましたか、エ、實は折々此邊でお目に懸かりまする事でございますが、一度はお尋ねをして居ようと思つて居りました、餘り私しも斯やうな風躰をして居りますので、夫れで何時も遠慮をして控へて居りました、貴方は矢張り高山の若旦那樣でございましたか、私しは百々村の百姓で佐十と申しまする者でございまする　彦九「ムヽウ、聞いたやうに思ふが一向覺えぬが、夫れではお前は細谷の宅へ來た事があるか、佐十「エヽお宅へは尚だ伺つた事はございませんが、實は私しは貴方の親旦那樣に前廉非常に御厚負を受けて居りました者でございます、と云ひまする、親旦那樣が毎も山へお越しに相成りまする節は、お供をさして頂きました者でございます　彦九「アヽ左樣か、ぢやア父上が獵にお出でなされた時に供をしたと云ふのか、ムヽウ、アノ百々村の獵師と云ふのはお前であつたか　佐十「左樣でございます、親旦那樣には一方ならぬ御恩を受け

ました者でございます、尚だ貴方がお坊さまの時分でございましたから、定めて御存知はございますまいが、親旦那様は至つて鐵砲がお上手でございましてな、鐵砲ばかりではない、弓矢も中々私しなどは足元へも寄れませんでございました、其上劍術は、眞影流、また柔術は起倒流の奥義を極めなされたと云ふ事も承まはつて居ります、何時も私しの宅へお尋ね下さいまする時は、蝋色鞘の大小刀をお差になつて、深く笠をお被りに相成つて、表から佐十居るかと云ふお聲が掛かる、すると貴方、飼犬までも御恩になつた事は知つて居りますから、飛び出しては尻尾を掉りますのでございます、私しは其の時分の事を思ひ出しまするとと、親旦那様のお姿が今尚に眼前へ閃飛くやうに思はれるのでございます、月々の御命日には必らずお墓參りは怠つた事はございません、近頃は年齢を取りまして、山の獵も叶ひませんから廢めて居りますが、是れでも貴方十年ほど前には

雄藩の名人と云はれまして、此の近邊では隨分世人に評判をされましたのでございます　彦九「ムヽウ、左様か、するとお前は今でも乃公の阿父さんの事を思つて居て呉れるのか　佐十「ハイ、御覽の通り見る影もない老爺でございますが、是れまで人間の道を違へました事はございません、若旦那様、恐れ入りました事でございますが、何うかお序の節一度手前方へお立寄りさる事は出來ますまいか、旦那様の息の掛かつたお形見の品もございますれば、厚顏しいお話ではございますが、何うぞ一應お立寄りの程を願ひたうございます　彦九「ア、左様か」と、亡父の物語りを聞いて、心の裡に悅んで居りますところへ、偶と此の事を聞いて　彦九「何んぢや、私の父上の息の掛かつた形見がある、ムヽウ、夫れでは一遍そのお形見の物を私に見せて貰ひたい　佐十「ハイ、有難うございます、別段お形見と云ふ程の物でもございませんが、夫れは楠正成公の軸でございまして、

彦九「ムヽウヽすると何か、お前の宅に楠公のお掛軸があると云ふのか　佐十「左様でございます、先祖から私しも持ち傳へて居るのでございます、旦那様が何時も私しの宅へお越し下さいますると、先づ第一番に其れを御覧下さいまして、壁に掛けて其の前にお坐りあそばして、マア今日は綏り佐十支度をするが宜い其の間乃公はチョッと河内守様に會つて行かうと仰しやつて、其の軸の前で獨言を仰しやつて、種々お話あそばします、瓢箪のお酒を召上りまして、生きたる人に物云ふが如くでございました、夫れでまたお宅様に其の時分居りました、今は何うなりましたか、下男の豊藏と云ふ者がお供をして參りまして、夫れが持つて居りましたのが、旦那様の御秘藏の弓矢でございます其の弓矢は私しは今でも大切に持つて居るのでございます　彦九「ムヽウヽ、左様か、亡父の御秘藏の品と聞いて見れば見たいものだちやなア　佐十「夫れは何時でも御覧に入れます、私しの爲には旦那様のお形見でございますから、大切に今でも持ち傳へて居るのでございます　彦九「夫れは結構だ、ちやア今から行かう、お前の宅で少暫邪魔にならうか」　老爺は彼方此方を見廻しまして、佐十「けれども若旦那様、貴方は夜道を何方へお越しになりましたのでございますか、乃公は最う用は濟んだのだ、實は今日伊勢崎の先生の處へ參つた歸途である、兎も角も一緒に行かう」　老爺は之れを聞いて大いに悦びました　佐十「實は若旦那様、私しの宅は賊に見る影もない荒家でございまして、百々村の佐十とお尋ね下さいましたら、村外れでありますが村の者は皆存じて居ります、ですから直に分ります、けれども私しの宅へお立寄り下さいまして、また細谷までお歸りになれば、餘程夜道をお更しにならねばなりませぬ、餘り遲くなりましてはお宅様でもお案じでございませう　彦九「イヤ〳〵、介意はぬから、夜道は乃公は馴れて居る、夜が明けるまでに歸つたら宜いのだ

佐十「夫れは何うも有難うございます、ぢやア恐れ入りますがお供を仕つります、毎も貴方は夜分は遅くなるのでございまする

彦九「左様ぢや、日々通うて居るのであるから　佐十「ヘイ、中々細谷からは遠方でございます、失禮ながら何の御用で入らつしやるのでございます　彦九「用と云ふのは他事でもない、此の伊勢崎の松本先生の處へ、讀書の稽古に參るのぢや　佐十「左様でございまするか、夜分のお稽古で細谷から日々お通ひなさいまする、往復でチョッと五里ほどもございます、何うもイヤ恐れ入ると、つた事でございます、私しなどは百姓の事ゆゑ夢にも其のやうな事は存じません、矢張り貴下方には夫れだけの御苦勞と云ふものがございまするか」と云ひつゝ、徐々歩き出した、漸う二三丁參りまするとと、百々村の方へ曲つて參りましたが、往來とは異ひまして、餘程道が細く、畔道が所々にあります　佐十「若旦那様、畔とは異ひまして斯う云ふ道でございますからお危なうございます、何うぞお氣をお付けなさつて　彦九「アノ乃公は大丈夫、乃公は氣を付けて歩くが、お前足元を氣を付けなさい」と云ひつゝ、提燈を見せて遣つては度々佇止つては老爺に氣を附けて遣ります　彦九「コレ〳〵、其處に水の流れがある、氣を付けなさい」足元へ提燈を翳して遣りますから　佐十「ハイ、有難うございます、エヽ、私しなどは毎も暗りで歩きます、能く分つて居りますから、併し私しは此のやうな嬉しい事はございません、是れも親旦那様のお引合はせかと心得まする、細谷の若旦那様が私しのやうな宅へお立寄り下さると云ふのは、誠に結構な事でございます　彦九「危いぞ、老爺、足元に能く氣を付けなさい　佐十「最う此處は百々村の内になつて居ります　彦九「左様かお前の宅は何の邊だな　佐十「ハイ、此の向ふに森がチョッと見えて居ります、彼の森を一つ向ふへ越しました處でございます、村の外れでございます、イヤ最う人間の住居するやうな處では

ございません、至つて陋しい處でございます、だがお厭ひさへなければ滝茶は何時も沸かしてあります、お途次でございますから、何うか御休息所にお立寄り下さいませ、寒しも差支へはないのでございます、甚だ恐れ入りましたが、之れを御縁として、何うかチヨツト〳〵お立寄りの程を願ひたうございます、

彦九「ア、左様か、夫れは何により有難い、イヤ是れから然うさして貰はう、何分此節は自分の宅に用があるから、ツヒ宅の手傳ひをせんければならぬ、近頃は兄さんから暇を貰つて、夜になると松本先生の方へ出かける、其のお稽古が濟むと直に先生の方から歸る、然うすると恰度立歸ると夜の拂曉だ

佐十「ヘイ、夫れでは何んでございますか、彼夜お歩きなさるのですか

彦九「然うぢや、マア此節は然うやつて居る、ところが今日は先生の許でお正午時分から御講義と云ふものが初まつたのだ、其の御講義を聞いての歸途であるから、今時分に歸つたのぢや、平日

なれば今頃から先生の許へ出て行く、恰度御講義が濟んだ時分は、然うぢやな、最う亥刻過ぎであらう、餘り激しい雨降りには止す事があるが、大抵天氣の時は欠かした事はないのぢや、ナニ道の少々悪い位ゐ、また夜の更ける位ゐの事は、何んとも思つては居らぬ

佐十「左様でございますか、イヤ此の老爺などの到底も眞似の出來る事ではございません、若旦那様、彼れを御覽なさつて」と、指示を仕ますなら、見ると小な燈火の光りが見ねて居ります

佐十「彼の向ふに燈火の光りが見ねて居りませう

彦九「彼れが、ア、〳〵見ねて居る

佐十「彼れが私しの宅でございます、どうせい私しの歸りが遲いものですから、私しの娘が待ち兼ねまして、迎ひに出て居るものと見ねます、何うやら提燈を提げて居るやうに思ひまするが、イヤ最う人間の世の中に何が愛しいと云つても、親一人、子一人の親身の情ほど懐かしいものはございません

彦九「ア、左様ぢや、然うするとお前は家内は

ないのか　佐十「ハイ、三年ばかり前に亡くなりました、後は十歳になりまする娘ばかりでございます、夫れですから村の者が、何彼に就て不自由であらうから、恰度好いのがあるから、嫁を一人世話をして遣らうと云つて呉れる人もありますけれども、私しは考へました、茲で後妻を貰ふとなると、僅た一人の娘を繼母の手に掛けるのは大きに可愛さうと思ひまして、夫れで不自由を我慢をして、父子兩人で暮して來ました」と、話を仕ながら、追々く近寄つて參りまするとも、最う其の間は二三十間になりました、佐十は大きな聲を出しまして、燈火の光りを目的に佐十「お霜や、お霜ちやアないか、アヽ遲くなつた、大きに待ち遠であつたらう、今日はお客様をお連れ申して參つたのである」と云ひながら、近寄つて來ると、是れを便りに森の際に呆然と佇んで居りました茲は、バタ〳〵と駈けて參りまして　お霜「阿父様や、遲かつたな」と側へ駈け着けまして、高山の姿を見て大

いに驚いて、ヒヨイと後方へ下りまして、唯目ばかりパチ〳〵さして、佐十と云ふ老爺の後の方へ隱れるやうに致します　佐十「若旦那様、是れが私しの娘でございまして、お霜と申す者でございます」　高山は之れを聞いて提燈を際して見ると、年頃は十歳位ですが小な身躰でございます、前髪を垂れましてふつくりと致した、黑目勝ちの娘、何分此邊で育つたものでありますから、野仕事を致して居ると見ね、姿は至つて窶れて居ります木綿縞の布子の繼ぎ〳〵になつたのを纏ひまして、袖なしのやうな物を着て、藁草履を穿いて、提燈を提げて居ります、だが何んとなく愛らしい顏をして居ますが、何分人馴れぬものですから、唯目ばかりパチ〳〵さして居るとのみ　お霜「阿父様、何して居たのな」と、子供ながらも恨み顏、佐十は頷きまして　佐十「イヤ、今日はな、私も少し慾張つてツヒ日暮の頃まで仕事をして居たのぢや、夫れゆるッと手間取つた、其の代り結構なお客

様を御同道申して來た、コレお霜や、此方へ來い、茲にお在でなさるお方様は、何時もお前に話をする、細谷の旦那様の御子息様ぢや、依つてお前は叮嚀に御挨拶なさい」お霜「はア、顔を眺めて居ります　お霜「マア旦那様、斯やうな陋苦しい宅ではございまするが、何うぞお這入りあそばして下さいまするやう」と、お霜は先きに立つて内方へ這入りまして、行燈に燈火を移した、是れでパッと内方の容子が分りました、其のうちに老爺は肩に擔いで居りまする柴を下ろしまして、漸う内方へ這入つて參りました　佐十「お霜や、お茶を上げんか、何をして居るのぢや　彦九「イヤ、茶は欲しくはない、父上の形見と云ふのを私は見たいのぢや　佐十「宜うございます、直にお見せ申しまする事でございます」と云ひつつ、手に提げて居りましたのは、背中の柴の中から抜き取つたものと見ゐまして山櫻の一枝、之を娘のお霜に見せまして　佐十「サアお土産を持つて歸つたぞ、

是れが今日の土産だ、早速佛檀を開けて此の花を佛様にお供へ申して呉れい、佛檀に旦那様は在らつしやるのだから、定めてお悦び下さる事であらう」お霜「佛檀に旦那様が在らつしやるの」と、不思議な顔をして、居りまする佐十「アゝござらつしやるとも、御位牌はなくとも御靈をお祀り申してあるのぢや、サア何うぞお上り下さい」と、老爺は圍爐裏の側へ坐つて粗朶を焚べながら　佐十「何うぞお煖り下さい、春と云つても尚だお寒うございますから」彦九郎は上へ上りまして宅の狀態を見ると、奥と臺所との二室限り、其處に筵が布いてございます、併し臺所の圍爐裏は至つて大きく切り、上から自在竹のやうなものを下ろまして、是れには釜が掛かつて居ります、其の釜は眞黑氣に煤つて居ります、お霜は親父から受取つた山櫻の一枝を奥室の方へ持つて參りましたが、佛檀と云つたところが極小なものでございます、何んの事はない、二斗米箱をチ

ヨッと立てましたやうなもので、夫れが床の間の側に置いてあります、其の側の方には、細谷の良左衛門が下男に持たして山猟に來る度に、茲の宅へ預けて置いたのでございますが、重籐の弓と鷹の羽の矢一筋、夫れが恭しく床の間に飾つてあります其の前の處には天照皇太神宮の掛軸を掛け、側の方を見ると、鐵砲だとか、或ひは山刀やうな物が飾つてございます、百姓と云つて唯の水呑百姓ではないと思はれるところの有様でございます、漸う佐十は粗朶を燃やしながら

佐十「若旦那様、何んにもお饗應の品はございませんが、夜風は尚だ寒うございますから焚火は何よりの御馳走でございます、粗朶は宅に幾らもございますから、何うぞ御緩りとお煖り下さいまするやう」片傍の茶碗へ釜の湯を柄杓にて汲み出だしましたが、眞黑氣でございます

佐十「サア何うぞお茶を召上つて下さいませ」彦九郎は初めて來た宅なれども、何んとなく懐しく思ひまして、佐十にも娘に

も初めて會つたとは思はれません、ところがお稚は子供ながら忠實々々しく立働いて居るのでございます、何んとなく心を引き付けるやうな氣が致します、佐十は床の間を指示まして

佐十「若旦那様、彼の弓矢が親旦那様のお形見でございます、お亡くなりなさいまする恰度十日ほど前の事でございました、毎もの通りお越しなさいますると、今日は少し氣分が勝れぬやうに思ふから、山へ行くのは廢さう、何れ雨三日のうちにまた出直すから、當分此の弓矢は預かつて置いて呉れいと斯やうに仰しやいまして、私しの宅から山へは入らつしやらず、其儘お歸りあそばした事がございます、夫れが遂に永のお別れとなつたのでございます、夫れですから死んだ婦アは至つて物堅い奴でございますから、細谷の旦那様からお預かり申した弓矢を此儘宅に置いては濟まぬ、依つてお前さん細谷のお宅へ持つて行つてお返し仕なさいと度々申しましたが、お恥かしい事でございます

るが、何分其日生活の斯う云ふ稼業でございまして、實は日々の生活に追はれまして、今日持つて行かうか、明日持つて參らうかと思ふうち、ッヒ手後れを致しまして、嬶アも遂に病死を致して了ひ、何時しか且那様のお形見の品となりまして、濟みませんが今尚に斯うやつてお祀り致して居るのでございます」老爺はポロ〳〵涙を零して物語りを致しました、彦九郎は彦九ムウ、彼の弓矢がお父上が持ち傳へになつた品であるか」と雨眼に涙を浮めながら、其の座を起つて鏡て弓矢の前に進み出でましして、宛ながら生きたる者に物云ふ如く、弓矢に對つて兩手を支へ、少時は平伏を致し居りましたが彦九「お懐かしうございます、阿父様、今日は劔持の叔父様のお惠みに依つて、貸して下さいました提燈の燈火が縁となつて、此の百々村にてお形見の品を拜さうとは思ひも寄らぬ事でございまして、私しは實に夢にも今日までは存じませぬでございます、圖らず佐十の引

合せに依つてお目通りを致し、實にお懐かしい次第でございます、當家の亡主は阿父様を慕ひまして、三代相恩の家來に優つた其の志ざしは、彼れの面に現はれて居ります、細谷の家には數々のお形見の品もあり、またお位牌もお祀り申して居りますが、清き御靈は此の弓矢の上へお留り下されて、當家をば守護なし、佐十親子の將來をお守り下し置かれたく、彦九郎、其の儀をお願ひ申上げまする事でございまする」と、宛ながら生きたる父に物云ふ如く少時は平伏を致し居りましたが、漸う顏を擡げて、亡父の手にせし弓矢を打眺めて居りましたが、茲に楠公のお掛軸と云ふのを見たと親しくなると云ふ、彦九郎義俠心を現はすの物語り、次回に申上げまする、

第三回

彦九郎は年齢に似合はぬ老せた言葉でございまして、弓矢に對つて宛ながら生きたる父に挨拶をする如きの有樣で、佐十は之れを聞いてホト〳〵感心いたしました

佐十「若旦那樣、恐れ入りましたが、親旦那樣からお預かり申した其の弓矢でございます何時までも家に留め置きまして、横着者だと定めてお叱りもございましうが、何分其日稼ぎの貧乏人でございまして、ッヒ持つて行きまするに參り後れましたやうな譯でございます、其上旦那樣の手に觸れてお持ちなされました品を、一日も長く留め置きましては申譯がございませんが、併し夫れには矢張り日々の供物を欠いだ事はございません、今日は思ひ掛けなくも若旦那樣がお越し下さいまして、老爺は此のやうな嬉しい事はございません、明日は仕事を休んでもお返しに參りませうと心得て居りましたのでございます、私しは惡氣があつてお返しに參らぬと云ふのではないのでございます、何うか惡しからず思召の程を願ひまするでございます

彦九「左樣か、併し此の形見は別に返すに及ばぬではないか、長く當家に秘藏して置いて呉れい

佐十「何んと仰しやいます、夫れではお返し申さずとも宜いと仰しやいまするか

彦九「然うぢや、改めて乃公がお前に遣るから、能く〳〵死後の吊ひをして、お前の宅に秘藏をして置いて呉れい、

佐十「アノ私しに下さいまするのでございますか、アノ恐れ入りましてございます、若旦那樣、夫れでは頂きましても構ひませんか

彦九「高山の家には二枚舌を使ふ者はない、父上に代つて私がお前に遣はすのぢや、納めて置いて呉れいも有難うございます、若旦那樣、御恩の程は忘れぬやうに、子々孫々に至るまで、家の寶と致しまするのでございます

彦九「ムウ、夫れでは受けて置いて呉れるか、夫れでこそお父上も御滿足であらう、此の弓矢の光りも出ると云ふものである、夫れはそれとしてお前の宅に秘藏して居る、其の楠公樣の軸と云ふ

ものを見せて貰ひたいのだ　佐十「ハイ、畏まりましてございます
ユヽ唯今お目に懸けますると、是れも矢張り旦那様
の息の掛かつた品でございまするから」と云ひながらも、老爺
は奥室の天井に釣下てございまする、油紙包みの箱を取り下し
ました、夫れを解いて、箱の儘彦九郎の前へ差出だし　佐十「サア
何うぞ之れを御覧を願ひます」彦九郎は蓋を取り中を見ると、
一つの鬱金の袋が掛けてございます、其のうちより出して軸を
見まする と、古金襴の裱装ではありまするが、別に落款はござ
いません、見ると中々書偽は能く出來て居ります、土佐風に描
いたものと見ねまして、楠公の出陣の容姿でございます、熟と
見て居ると、今にも口を利きさうに思はれる　彦九「ホヽウ、イヤ
是れは見事なものぢや、失禮ぢやがお前の宅には似合はぬ品ぢ
や、マア〳〵大切にして置きなさい　佐十「ハイ、有難うございま
す、旦那様がお出で下さいまするとこの掛軸をお掛けあそば

して、其の前に坐つて禰々お話がございました、折々は瓶のお
酒を此の掛軸の前で召上がりなさるのでございます、私しも兩
三度お相伴をさせて貰ひました事がございます　彦九「ムヽウ、左
樣かお前は何うして此のやうな物を持つて居るのぢや　佐十「ハイ
是れは先祖代々持ち傳へて居ります、唯今では滿らぬ水呑百姓
を致して居りまする者でございます、夫れ
此の村の名主の一つも勤めて居りました者でございます、夫れ
が段々衰へて了つて、今では此のやうに零落れまして、イヤ最
う仕方のない身分となりました唯家に殘りまするのは、私しの
身躰と此の掛軸とのみでございます　彦九「イヤ、成程、アヽ夫れ
でなくては此のやうな立派な物が、お前の宅にある筈はない、
縱ひ何は殘らずとも御先祖の血が遺つて居ると云ふのは、水呑
百姓は致して居つても爭はれぬものぢや、何んとなく氣品のあ
るところを見ても分る、併し此の掛軸は大切にするが宜い、ま

た娘の子も大切にさつしやい　佐十「有難うございます、私しは今にも命が盡きましても、此の掛軸と娘とが無事であれば、家名が潰れると云ふやうな事はマアないのであらうと思ひます　彦九「夫れは然うであるとも、父のお目に注まつた掛軸を見せて貰うて、私も殊の外に悦ばしい、マア何うぞ其方へ納つて置いて呉れい　佐十「さて若旦那様、お越し下さいました紀念にお願ひ申上げたいと存じまするのは、其の掛軸に何か一つ書いて下さいまする事は出來ますまいか、其の端の方へ何んでも宜しうございますから　彦九「滅相な事を云はつしやい、私のやうな者が是れへ書くと、折角の絵が反古同様になつて了ひますぞ　佐十「イヤ、然うではございません、別に私しは之れを賣りものにするのではございません、宅の寶でございまして、縱ひ百姓して居りましても此の掛軸は大切にして居ります、今でも考へて見ますると私しの宅の先祖も矢張り少しは忠義をしたものであらうと、斯やうに考へます、何うかお願ひでございますから、是非とも若旦那、何んでも宜しうございますから、お認め下さいまするやう願ひます　彦九「併し是れが花鳥山水と云ふのとは違つて、古今武將の繪錦と云はれたる楠公の肖像へ對して書くと云ふのは、何うも恐れ入る事ではないか　佐十「イエ決して其様な事は介意ひません、何うぞ一つ是非お願ひ申上げたいのでございます、と云ふのは、私しも仄かに承まはつて居ります、何んでも若旦那様の御先祖は、新田左中將義貞公の御家來で、高山遠江守様と云ふ事は、豫て承まはつて居ります、楠公様と新田様とは、同じ朝廷にお仕へなさいました、忠義なお武家であつたさうでございます、新田様の御家來の御子孫が、楠様の畫像に雜をお染め下さると云ふのは、何かの縁でございませう、お箱や、其方の硯箱を持つて來いよ」と云ひながら、水で硯を現はしまして徐々墨を磨り始めました、考へて居りました彦九郎は　彦九「ム、

ッ、ちやア構はないか」と、漸う掛軸を夫れへ擴げまして、尙も少時考へて居るうち、老爺は墨を磨りまして　佐十「此のやうな惡い筆でございますけれども、何うか是れで御辛抱を願ひますと、一本の筆を全然水で洗ひまして、彦九郎の前に差出だした彦九郎は此の筆を取つて墨を含ませ掛軸を熟と見て居りました

が、驚て其處へ、「楠正成者本姓橘氏、有忠義之勇、籌策之巧其守城之勞、皆是勤王之志、世人悉知之、故不贅此」と書き終りまするとゝ、片傍に筆を措き、少時彦九郎は見詰めて居りましたが　彦九「佐十　佐十「ハイ　彦九「折角の書像を汚して何んとも濟まぬ事をしたな」　老爺は大きに悅びまして　佐十「イヤ、結構でございます、私しには何んにも分りませんが、若旦那樣、アゝ御筆蹟はお見事な事でございます、イヤ何うも爭はれぬものでございます、鷹は矢張り鷹を生むと申しまして、是れで私しも本望が叶ひましたのでございます」　片傍に之れを擴げて墨の乾くのを

待つて居ります、其のうちに彦九郎はズッと表の方を見詰めましたが　彦九「老爺、大分夜も更けた容子である、最う何時であらう　佐十「サア一向時刻などは私しは氣が付きませんが、餘程今宵は更けて居りまするやうに心得て居ります、道は不用心ではございませんか　彦九「ナニ、其樣な事は氣遣ひはない、ちやア私も徐々歸ると仕よう、子供も眠たからう」と云ひつゝ其の座を起つて弓矢の前に來りまして、再び兩手を支へ　彦九「ちやアお父上、彦九郎は是にてお暇を仕ります、何うか佐十父子をお守り下さいまするやう、宜しくお願ひ申上げまする」と、挨拶が終りまするとゝ、片邊に置いてある小田原提燈に燈火を點けまして　佐十「誠に若旦那樣濟みません、夜中お足を止めまして何んのお愛相もございません　彦九「ナニ、私は誠に結構な事であつた、何うぞ之れを緣として、またお前の宅へはチョイ〳〵寄せて貰ふぞ　佐十「有難うございます、私しよりお願ひ申上げたい事でご

ざいます、何うぞ何時なりとも陋苦しい宅でもお厭ひなくば、お立寄りの程を願ひまする」と、父子の者は態々入口まで送つて出て、此の彦九郎に別れを告げる事になりました、高山は百々村を後にして街道筋へ出ました、中々此の人は足は健脚なもので、スタ〳〵スタ〳〵急ぎまして、漸う其夜の丑刻過ぎの頃ほひに至つて、細谷の宅へ立歸りまする、裏手の切戸を叩きました、先き程よりツツ〳〵して居りました老婆は開けますよ」縁側の戸を開いて庭に下り

祖母「何方でありますか

祖母「ハイ、

彦九「お祖母さま、大層遅くなりました

祖母「オヽ彦九郎か、表へお廻り

彦九「ハイ、チョッと耳門を何うぞお開けを願ひます」頼んで置いて表の方へ廻つて來る、漸う老婆は耳門を開けまして

祖母「大層今夜は遅くなつたではないか

彦九「誠に遅くなりまして済みません、何れ明日緩りとお話いたします

祖母「別に間違ひが出來たのではないか

彦九「イエ、何も變つた事はございませんで

したが、ッヒ盡の御講義が遅くなりましたので早くお寝み」其夜は何事も云はず寝込んで了ひました、翌日になりまするとヽ、兄の專藏は相變らず夜のうちから起きて農業に行つて了ひました、彦九郎も時分を計つて我が居室から出て參り、手水を使つて臺所へ來ますると

祖母「彦や、お前昨夜は彼の時分まで何をして居ました

彦九「お祖母さま、誠に済みませんでございました、昨夜遅くなりましたと云ふのは、實は是れ〳〵斯やう〳〵の譯合でございまして、彼の百々村の百姓の佐十と云ふ者に出會ひました」と、其の事柄を詳しく話を致しまする

祖母「アヽ左樣であつたか、夫れは豫て伜の良左衛門が何時も山へ出掛ける時、連れて行かれたと云ふのは、常々私しも話に聞いて居りましたが中々佐十と云ふ者は朴訥な人間だが、甚らい正直な男と云ふ事は、伜から聞いて居りました

彦九「左樣でございます、家には今

でも父上の形見の弓矢を飾り付け、亡父の命日を吊うて居ります」と、昨夜佐十の宅にあつての次第を、詳しく話を致しましたるところから、お祖母さんも大きにお悦びなさいまして、夫れゆゑ昨夜は遅くなつた譯合であるとの事でございますから、別に小言もありません、其後は彦九郎は相變らず伊勢崎の先生の許へ通ひ居りましたが、折々は百々村の佐十の宅をも訪れるのでございます、極正直な人間には違ひないが、何分年齢を取つて家は貧に暮して居ります容子でありますから、種々な物をチョイ〳〵見織いで遣る事があります、父子は其後は彦九郎を主人の如くに敬ひまして、來る度毎に大切に致し居ります、さて彦九郎は追々最う身躰の骨組も變つて來ましたところから此節は伊勢崎の先生の許へ讀書の稽古に參るばかりでなく來る度毎に叔父の宅へ立寄つて、劒術または柔術、是等の稽古を勵むやうになりました、他の者が一年ばかりも掛かつて稽古をするところを、高山は物の一月經たぬうちに覚えて了ふと云ふほどに上達するのでございますから、叔父の長藏は大きに感心を致して、此の容子で二三年修業を致したら、屹度立派な者になれるであらうからと云ふので、本人を勵ましますから、本人も進んで稽古をする、恰度今年は十六になりましたが、躰格は至つて丈夫でございます、身長は今では五尺七八寸もあらうと云ふのですから、人々は之れを見て驚きます、細谷村では彦九郎に及ぶ者は一人もない、お祖母さまは彦九郎の身躰の壯健なのを見て大きに悦びなさつた、然う云ふ譯ですから至つて之れを可愛がります、彦九郎はお祖母さまを大切に致し、宛ながら兩親に事へる如く、また叔父の長藏は彼れの文武の道を勵むのを見て非常に悦び、何んでも御先祖遠江守の志を受け繼いで、夫れで先祖の名を揚げて呉れんければならぬと云ふので、益々勵まするから、彦九郎は十分忘らず勵むのでございます、だ

が幾ら文武の道を勵むからと云つて、宅に居る間は兄上の掛り人であり、依つて少しは氣兼もありますから、兄上に遠慮をして、折々は百姓仕事の手傳ひをするのであります、專藏は百姓一方の事ですから、然うなつて見ると、此頃は餘り兄弟喧嘩も致しません、彦九郎は農間は農業の手傳ひをして、日暮から暇を貰つて松本先生の許へ參つて、稽古が濟むと、叔父さんの宅へ立寄つて劍術柔道の稽古をする、宅へ歸つて來ますると十分夜が更けるのです、夫れですから目ばかり晃々とさして、我が好きな道を學んで居るが、餘り兄上の差支へにはならぬ、終ひには土地の者が噂を仕始めました

○「高山の弟の顏を見ると凄い、ちやア是れから彦九郎に、木兎と云ふ名を付けて遣らうぢやアないか」などと、噂を仕始めました、細谷の木兎と云へば誰知らぬものもないやうになりました、彦九郎は其のやうな事には頓着ございません、相變らず通つて居ります、ところが夏の事でございました、松本先生の許へ是れから出掛けやうと云ふので、尙だ暮れたばかりに宅を出掛けまして、一丁ばかりも參つた處で、一軒の百姓家の前を通り掛からうと仕ますと、大變に內方で物音が致して居ります、ガラ〳〵、バタ〳〵、膳椀皿鉢の類を投げ付ける音でございます、夫れと同時に女の金切り聲

女「サア殺せ、一思ひに殺して呉れい、殺しやアがれ

男「オ、手前の望み通り殺して遣るから、覺悟して斃死れ」バタ〳〵ドタバタ、大變に立廻りの容子でございます、彦九郎は其の門口に佇止まり、宅の容子をヒョイと覗いて見ますると、女は猛り狂ひ

女「殺すなら殺せ、其の代り焰魔樣の前へ出たら、汝の

△「然う

男は飛び歩く、全で何んの事はない木兎だな

○「イヤ、違ひな

悪い事は何も彼も訴へて遣るから　男「何んだ、馬鹿を吐かせ、焔魔も何もあつたものか、サア汝れの望み通り殺して遣るから覚悟を仕ろ」と、取つて押へんとする、女は一生懸命　女「アレーエ、人殺し〳〵」と聲を立てまして、振り切つて逃げんとするところが近處の者は是れまでに度々の事でございますから、誰も此の夫婦喧嘩の仲裁をする者がない、此の宅は細谷村の兵吉と云ふ者は放蕩者でございます、此の兵吉と云ふ百姓の宅でございまして、年中大酒飲ひで、其上に夫婦喧嘩の絶間がない、彦九郎は豫て聞き及んで居りまするが、また兵吉の泥酔漢奴が夫婦喧嘩を致して居るのであるかと、熟と眺めて居りますると今日は餘程激しく、兵吉は女房の喉元を押へ、大肌脱ぎで、八寸の出刀を逆手に取つて振り被つて、然も女の上に馬乗りに相成つて、既に彼れが氣管に突き立てやうとして居りまする事が出來ない、忽ち内方へ飛び込から、彦九郎は沈と見て居る

んで參りました　彦九「待てッ」と聲を掛けるや否や、兵吉の利腕を無手と掴んだ　彦九「ヤイ、何をするか、馬鹿者奴が、待たんか」と呼ばゝつたが、その聲は雷の如く、更に十六位ゐの子供とは思へません、殊に此の人は大力であり、躰格は大兵でございます、兵吉はハッと驚いたが後方を振り向き　兵吉「ナニッ」と云ひさま起上らんとする、其の暇に下に押へられて居ました女は、漸う虎口を脱れまして「人殺しーイ、人殺し」と云ひながら、夢中になつて庭に飛び下りやうとした時、彦九郎は彼れを熟と睨め附けまして　彦九「ヤイ、待て、外へ出る事はならぬぞ、待て」と云つたら待たんか」と、凄い目でグッと睨んだ、此時起上つた兵吉は肱を捉まへられた儘　兵吉「ヤイ、汝れは他の家へ應答もなく、何しに來やアがつた」と、振り解かんとする、此方は此場を逃んとして居る女房を睨め付けて居りますから、女は逃る事は出來ぬ、縁側へベッタリ平倒つて丁ひ唯目ばかりバチ〳〵

さして、太息を吐いて居ります、中々幾ら兵吉と云ふ百姓が睨いても、一旦掴んだ手は放しません　兵吉「此ん畜生、何を仕やアがる……イヤ、汝は木兎ぢやな　彦九「左様ぢや、私は木兎だが、貴様は毒蛇だ、併し木兎は人殺しはせぬ　兵吉「何を吐かしやアが る、此ん畜生、放さんか　彦九「イヤ、放さぬ、貴様の心の改まるまでは決して放さぬ、サア何うぢや　兵吉「ア、痛い〳〵痛い」と締め付けられましたるところから、顔を顰めて居ります、何分彦九郎は柔術の手で急所を締め上げたのですから、堪りません ブル〳〵慄へ出し、到底も振り放して逃る事は出來ませんから手を握られたるまゝ　兵吉「赦して呉れ、ア、痛い、堪忍して呉れヒイ〳〵云つて居りましたが、彦九郎は破れ鐘のやうな聲を發して　彦九「然らば今日より以後及物三昧は仕ないか　兵吉「ア、仕ない〳〵、決して仕ない　彦九「何うだ、是れから人間の道を履むか　兵吉「ア、痛い〳〵、ヲ履む、履みます　彦九「夫婦喧嘩は決して相

成らんぞ、ヤイ、貴様は百姓ではないか、能く物を考へて見ろ毎も表を通ると手前は昼間でも酒を飲で居る、今宵も斯うして皿鉢の破たところを見ると、矢張り先刻から酒を飲で居たのであらう、能く聞け、此の作物と云ふ物はな、其の作る者の心に連れるのである、自分の業は耕作一方、夫れに何んぞや、貴様は鋤鍬を持たずして、是れに替ふるに盃を以てする、糞桶を擔ふ手で女房を毆ると云ふ、夫れで貴様は何處で立つ」前に引き据ゑまして、片手を握り詰めたるなり、徐々異見を仕始めました、兵吉は何んの事はない、猫に睨まれた鼠の始く、唯呆然として彦九郎の顔を見て居ります、彦九郎は少しく言葉を柔げまして　彦九「お前の喧は以前から開いて居る、お前は賭博を打つそうぢやな」何んとも云はないで、目をパチ附かせて居りまする　彦九「賭博を打ち、喧嘩をする、誠に夫れは宜くない事ぢや、お前の身躰は誰から受けたのであると云ふ事を知つて居るか、

夫れは母親に生み落されたのであらうが、また其の親の上には先祖があらう、返答して見よ」兵吉はグッともスッとも云はずして、自分の爲には弟が子供のやうに思ひまする者に、道を說かれまして、一言半句の言葉もない、終ひには頭が擡らぬやうになつて了ひました　彦九「親から受けた身躰は貴樣一人の物では ない、親から頂いた大切な其の身躰を賭博や、喧嘩の爲に僞を受けて何んとするのぢや、此儘棄て置く時は、如何なる事を仕出ださんも計り難く、結構な身躰を生み付けて貰つても、道に背いたる行ひをしては、心の底まで腐れて了ふ、後には鳥獸類にも劣る事になるのぢや、お前は結構な人間に生れて、鳥獸類になりたいのか、鳥や獸類の役が仕たいのか」兵吉は終ひにはポロ〳〵涙を飜し始めましたが、聊か頭を擡げまして、高山の顏を見詰め　兵吉「成程、私しが惡うございました、此後は吃度心を改めまするでございます　彦九「ムヽウ、嘘は吐くまいな　兵吉「ハイ

神樣に誓ひまする、決して嘘は申しません　彦九「可し」と云ひながらも、提らへた手を放しました、夫れと同時片傍にあつた出刀庖丁を取上げまして、毫しも油斷は致しません、兵吉と云ふ奴は飲だ酒も醒め果て、今まで握り詰められて居た肱を擦りながら、彦九郎の前に兩手を支へ　兵吉「アー、私しは生れましてから、今日のやうな怖ろしい目に遭つた事はございません、また今日のやうな有難い事を聞いた事もございません、コレ嬶ア、汝れも茲へ來て、若旦那樣の前で手を突いてお禮を申せ、若旦那樣がお出で下さらねば、汝れの喉元へ出刀庖丁を突込んで、血塗れの騒ぎをやつて居るのだ」女房のお關は之れを聞いて緣側から、夫れへ這ひ上つて來ましたが、兵吉の後に坐り、兩手を支へ　お關「有難うございます、お蔭で唯今の騒ぎを鎭めて頂きまして、何んともお禮の申しやうもございません、ッヒ私しの悪かつたので、此のやうな騒ぎが始まりましの梶の取りやう

た彦九「然うぢや〳〵、お前が然う云ふ氣になつて居れば、喧嘩と云ふものは出來ない、自分が善いと思ふから喧嘩が出來る、お前も惡い、また兵吉も惡い、此の惡い同士が兩人集つたから斯やうに喧嘩が出來ると云ふものぢや、是れから後は稼業を勵んで一人前の男になれ、お前も心を改めるのが女の道、また家の爲ぢや、兩親に受けたる身躰を大切にして、卒ざ御國の御爲と云ふ時には、我れから先きに進んで矢玉に掛かると云ふのが人間の道ぢや、依つて常に道を履み業を勵んで稼ぎさへして居れば、間違ひと云ふものはない、お前もほに本に生れた人間と云ふ事は知つて居るであらう、此の國に生れる者は縱ひ山の奥にあつても、皆是れ朝廷の民と生れて來たのだから、朝廷の事を有難く思つて、五常の道を守つて居れば、喧嘩と云ふものは出來ない筈だ、楽てる一命は僅た一つ、けれども楽て場處がある解つたか私の云ふ事を、能く聞かつしやい」是れで夫婦の者は大分鎮まつた容子でございますから、熱心に人間の行ひと云ふものを說いて聞かせてお遣りなさつたが、一言々々實に熱心が溢るゝばかりでございます、兵吉もお關も今までは義理人情と云ふものを辨へずに居つたのですが、今彦九郎の言葉に、動かされまして、涙を流し兵吉「ア、恐れ入りましてございます、屹度若旦那の仰せを守りまする事でございまする」と、眞から心を改めた容子でございます、人間は性素善なるもので、此の兵吉夫婦は今得の夫婦喧嘩を仲裁をされたばつかりに、生れ轉つたやうに和成つたが、茲に兵吉は家内と相談の上、一條の義心を現はすと云ふ、追々お話も佳境に入つて參るのでございますが、チヨツと御免を蒙りまして次回に、

第四回

さて此の村で至つて評判の惡かつた兵吉夫婦の者は、先程から

段々人間の道を說き聞かされると、兩人とも涙を飜して　兵吉「イヤ、能く解りました、是れからは屹度改心を致しまして、他に嫌がられぬやうに氣を附けて働きますでございます　彦九「ムヽウ解つたか、夫れは何より云ひ甲斐があると云ふもの、人間も善心に立歸れば物の用に立つ、隊の青い私の云ふ事を肯いて呉れると、私も大きに悅ばしう思ふ　兵吉「有難うございます、若旦那樣、本當に私しは今までの事を考へて見ますると、人間の屑ですな、併し此の屑も用ゐやうに依りましたら、お役に立つ事がありますでせうか　彦九「然うだ、世の中には棄てるものは一つもない、前非を後悔して眞人間の仲間へ入れば、舊惡は皆消ねて了ふのだ、是れからは稼業を勵め　兵吉「有難うございます、屹度心得ますでございます、私しは若旦那の今日の御恩は死しても忘れは致しません、萬一にも仰せられましたお國の爲に、一つよりない命を棄てる時がございましたら、其時は若旦那樣、私

しはお供を致しまして屹度お國の爲に盡しますでございます　彦九「イヤ、潔い言葉ぢや、私は胸が爽然と致した、ドリャ夫れでは別れを告げて、先生の許へ行つて來よう」と云ひつゝ、其場を起上りました　兵吉「ヘイ、若旦那樣、今から何方へお越しになるのでございますか　彦九「乃公か、乃公は伊勢崎の松本先生の方へ稽古に參るのぢや　兵吉「ヘイ、イヤ、今からですか　彦九「然うだ　兵吉「御本の稽古ですか　彦九「然うだ、本ばかりではない、叔父さんの許に立寄つて、また劍道を習ふのだ　兵吉「夫れは何うも若旦那、大變でございます、往來で五里もあるのでございませう　彦九「然うだ、毎夜出掛けるのだ、夫れだから乃公の事を水免と云つて居るではないか、乃公は徹夜に飛び歩く、貴樣は先刻然う云つたらう、先生の處のお稽古が濟んで立歸つて來ると、恰度夜が明けるのぢや」　お關「お關も側で之れを聞いて居りました、茲お關「アノ棄らいお方は違つたものぢや、感心いたしました」

で彦九郎は夫婦の者に別れを告げて、此處を出でまして相變らず松本先生の許へ稽古に參りました、然るに細谷の難物と云はれた兵吉夫婦は、其後ガラリと生れ變つたやうになつて了ひましたし、夫れですから、決して夫婦喧嘩などは仕ない、誠に睦まじく暮して農業に精を出しますから、自と宅の生活向きも樂になつて參りました、村の者は不思議に思うて居りまする位ゐ、是れ偏に高山の意見に依つてゞございます、彦九郎は其後は、兵吉とッと心安くなりまして、暇のある時にはチョッと行つて話の一つもするやうに相成りました、ところが恰度其の年の九月の事でございました、今日は彦九郎は畑の手傳ひを致さんと、お正午頃から鍬を擔げて畑の方へ出掛けやうとやつて參りましたが、相變らず木を片手に持つて居ります、今時道の方へ曲らうとすると、立木の蔭に悄然佇つて居りまするのは、佐十の娘のお霜でございます、高山の姿を見ると、夫れへ走り出でまして

お霜「オヽ、若旦那樣でございますか」之れを眺めましたる彦九郎は　彦九「オヽお霜であるか、何を致して居つた　お霜「ハイ、御免下さいまするやう、久し振りにてお目に懸かりました」と、挨拶を述べましたが、お霜は今年は十三でございまして、男揃に結つて居りまする、木綿袷衣を着まして、貧羸しう藁草履を穿いて、悄然として居ります　彦九「お霜、何んぞ用があるのか、乃公は久しく訪ねなかつた、佐十は相變らず壯健で居るか」云はれた時は、お霜は何んとなく涙に昏れ、彦九郎の顏を眺めて居りましたが　お霜「私しは若旦那にお願ひがあつて參りました、何ぞ父の一命をお助け下されまするやう願ひます　彦九「ナニ、佐十は何うか仕たのか　お霜「ハイ、若旦那樣の外に父の一命をお助け下さるお方はないのでございます、何うぞお助け下さいませと、合涙んで居ります　彦九「ムヽウ、妙な事を云ふな、乃公は相變らず伊勢崎の先生の許へは行くが、チョッと此の二月三月は

暇がなかつたので、お前の方へは訪ねなんだ、乃公に助けて呉れいと云ふのは、佐十が何んぞ難にでも遭つたのか、何うしたのか事情を云へ

お霜「ハイ、一月ばかり以前から病氣で寢て居るのでございます

彦九「夫れは困つた事だな、乃公は毫しも知らなかつた、何樣なに惡いお霜「初めは、風邪を感きまして、夫れが追々惡くなつて、唯今では餘程弱つて居るのでございます、

彦九「夫れは困つた事だ、何故そのやうな事なら乃公の方へ早く知らせに來ぬ、して醫師は誰に掛かつて居るのだ」お霜は此の親切の言葉を聞いて、胸一ぱいになつて參りました、泣まいと思ひながらも自と涙が出て來ます

彦九「コレ〳〵、お前のやうに然う泣いて居ては分らぬ、手當をして居るのかお霜「ハイ、お醫師樣から唯一度お藥を貰ひましたが、夫れより後は見舞うて呉れませんので、此節は水ばかり飲で居ります、實に父を見殺しにするのは殘念でございます、若し且那樣、父の一命を何うぞお

助けあそばして下さいまするやう」之れを聞いて彦九郎は大きに驚いた

彦九「乃公の手で癒る事なら癒して遣るが、泣な、マア涙を拭けお霜「有難うございます、若し且那樣、何うぞお助けなつて下さいませ」手を合はして拜んで居りますから

彦九「イヤ、乃公は醫師ではない、けれども今云つたのでは、藥を一度限りと申したが、何んで其樣な事をして藥て措くのぢや、其後は何うして居るのぢやお霜「度々お願ひに出ましたが、診察に來て下さいませんのでございます、お願ひ申しましたら、お藥をお願ひ申しました、目を持つて來い、さもないと藥を遣る事は出來ぬと仰しやいます

彦九「ムヽウ、不埒な事を云ふ醫師もあるものだ、醫師は仁術とも云ふべきもの、大方お前の宅が磯いからと云ふので、然う云ふ事を申すのであらうが、夫れは何んと云ふ醫師であるお霜「ハイ、彼の伊勢崎の船井先生樣を村の衆が賴んで來て呉れましたので、初め一度來て下さいました限りでございます

彦九「何ん

だ、彼の伊勢崎の龍井玄澤、町醫師ではあるが立派に玄關を構へ、伊勢崎では威張つて居る奴だ、甚だ不心得な奴、可し〳〵乃公が今夜伊勢崎へ行くから、屹度其の掛け合ひをして遣る」

お霜「有難うございます、若旦那樣、飛お霜は大きに悅びまして

非先生がお見舞ひ下さいまして、父の病氣が全快いたしましたら、私しは屹度その御恩報じを致します　彦九「左樣な事はせいでも宜い、お前は少しも早く歸つて佐十の介抱さつしやい、屹度彦九郎も其のうちに訪ねて遣るから　お霜「ハイ、旦那樣、何分宜しくお願ひ申します」と、お霜は大きに悅んで、何分親の病氣が氣になるものですから、數度頭を低げ、禮を述べて歸つて行きまする、後に於て途中に停止まつて後姿を見て居りましたが、彦九郎は、年齡は行かぬがお霜と云ふ奴は、親孝行の者であると感心を致しました、さて佐十も病氣とあれば定めて貯へもないであらう、彼等親子は何を食つて居るのであらうと、少

時考へて居りましたが考へて見ると何うも可愛さうだ、少しでも見繼いで遣らうと思ひまして、其儘畑の方へは手傳ひに行かず、遲くなつたからブラ〳〵歸つて參りました、物置に鍬を納つてノン〳〵臺所へ這入つて參りまして、上り口の處に腰打掛けまして、少時彦九郎は考へて居りましたが、お祖母さんは其けまして、少時彦九郎は考へて居りましたが、お祖母さんは其の音に奥室から出掛けて參りました　祖母「オ、彦九郎、お前は今歸つたのかね　彦九「ハイ　祖母「何だ御假は喫べないのかね　彦九「ハイ是れから頂きます　祖母「なア彦九郎、お前村外れに於て見馴れぬ女と何談をして居たさうなが、兄の專藏が見て歸つた、今から彼のやうな事をしては身の爲にならないと、非常に立腹をして居る、私に意見をせんければ可かぬぢやアありませんかと云はれて見ると、默つても居られない、お前此の村で見馴れぬ者とは、全体何處の者であるか」と、お祖母さんも氣に懸かるから考ねました、彦九郎は振り返つて　彦九「エ、夫れは佐十の娘のお

霜と云ふ者でございます」之れを聞いて祖母さんも是れまで佐十の事は聞いて居りますから、先づ安心を致しました　祖母「彼の悴良左衛門が雑撃ちに行く時供に連れて行つた佐十の娘か、其者とお前話をして居たのかね　彦九「左様でございます、お霜は今年漸う十三でございますが、中々親孝心なものでございます　祖母「夫れなれば何んで宅へ呼び入れて、お茶漬の一椀も喫べさせてお遣りなさらぬ、日頃のお前の氣象にも似合はぬではないか　彦九「ハイ、私しも左様に思ひましたが、佐十が大病に罹つて居りますから早く歸つて介抱して遣りたいと云うて居りますから、夫れぢやア早く歸つて介抱をして遣れと云ふので、別れを告げて歸して遣りました　祖母「何うも可哀さうな事だね」と云ふのは、此のお元さんは至つて情け深いお方ですから、自と夫れへ同情を寄せるのでございます、彦九郎は改めて老母に對ひ、彦九「お祖母さん、夫れに就きまして改めてお願ひを致しまする

事がございます　祖母「ホ、ウ、何んぢやな、お前の願ひと云ふのは　彦九「ハイ、他事ではございませんが、お金子を少々頂く事は出來ますまいか、何うぞして佐十父子の者に惠んで遣りたいと思ふのでございます」お元は之れを聞いて有理に思ひましたが　祖母「夫りやアマアお前の氣象なれば、我れは食べずと居ても、惠んで遣りたいと云ふ志は有理ぢやけれども、彦九郎、私は隱居の身だからお金子と云ふてはない、夫れなれば何んにも遠慮に及ばぬではないか、お前の口からお兄上様に頼んで、專藏から出して貰つたら宜いぢやアないか　彦九「左様でございます私しも其樣なに思はぬではないのでございますけれども、お兄上樣にお願ひ申して、また何か要らぬお小言でも承まはりますると、ツヒ氣持ちが惡うなるものでございますから、何うでございませうか、お祖母さん、貴方から一つお兄上樣に、彦九郎は徒費をするのではない、斯やうな具合で金子が要るのだから

と云つて、少々貰つて頂く事はなりますまいか　祖母「夫れではマア一つ私が専藏に頼んで見ませうから　彦九「何うか宜しくお願ひ申します」老婆は奥室の方へ這入つた、彦九郎は後にて勝を取出だし、最う日暮になつて参りましたから、庭の隅に腰打掛けたるまゝ食事を致して居ります、此方はお元は専藏の居室へ参りまするとゝ、専藏は頻りに何か帳面を調べて居ります　祖母「アノ専藏や　専藏「お祖母さん、何んです　祖母「唯今彦九郎が戻つて來ましてね、夫れでお前が先刻見たと云ふ女の事だが　専藏「ハイ、弟は何んと云つて居りました　祖母「詳しく調べましたら、彼れは百々村の百姓の佐十の娘のお鶴と云ふ者で、今年十三の子供だが、至つて其者は親孝行の者であつて、また佐十と云ふ者は此中もソレお前に云つた通り、悴の良左衛門が何時も山へ雉撃ちに行く時、供に連れて行つたと云ふ、此の佐十と云ふ者は中々正直者で、夫れで全に宅で良左衛門の御恩を忘れぬ為めとあつて、

必らず彼れは命日には香花を手向けて居るさうぢや、彦九郎も此の事を聞いて、折々は訪ねて遣るさうなが、宅はほんの父子で、彦九郎は平日から附合ひをして居る事である　専藏「然うですか、夫れなれば宜しいが、世間道端で女子と佇話をすると云ふのは、宜くない事です、だから用があるなら宅へ連れて來て話をするが宜しい、油断をするとヒヨンな間違ひの出來るものですから　祖母「夫れがな、佇話と云ふのは、實は斯やう〳〵の譯で合で、彦九郎から聞いて見ると、佐十の病氣の事を話をして、ツヒ彦九郎も歸るのが遅くなつたとの事、今戻つて彦九郎の云ふには、鶴に父子の者は身貧に暮して居るのであるから、可哀さうでならぬ、私に少々彼の父子の者に惠んで遣りたいと、彼れは彼のやうな氣象だから、頻りに頼んで居るのであるが、何んと専藏、お金子を少し貸して遣つて呉れる事は出來ないか」

之れを聞くと專藏は意しも情けのある男ではない、目を圓く致しまして

專藏「滅相な、其のやうな者に金子を出して居りましたら、私しが幾ら金子を拵へましても堪つたものぢやアありません、私しは其のやうな事に出す金子は一文もございません、彦九郎が助けたいと思ふならば、彼れの力で勝手にするが宜しい、

祖母「夫れは然うであらうが、何分彦九郎が好き嗜んで遊ると云ふのではない、佐十と云ふ者は至つて正直な者であり、阿父様の生きてお在でなさる時分には、非常に恩を受けたと云ふので、阿父様の死後を吊うて居ると云ふので、夫れで彦九郎が見捨いで遊りたいと云うて居るのぢや

專藏「夫れは誰でもです、私しでも阿父様のお墓參りは致して居ります、へイ、立派に欠かさずに參つて居ります、また阿父様が御恩負を受けたと云ふ百姓は、佐十ばかりではない、他に澤山あります、大躰百姓の子に學問をさすから、其様な事を云ふのです、其様な馬鹿な事があります

すか、其のやうな事を構つて居りましては、何程あつても身代は堪つたものではありません、斷つて下さい、私しは出せません」と、目に角を立て、立腹を致しましたから、お祖母さんは少しく憤然と致しました

祖母「專藏、お前は其のやうに云ふがね此の宅の身代はお前一人のものではありませんぞ、彦九郎に幾らか分けて遊らねばならぬのでありますぞ

專藏「夫れは遊ります、だが他人の世話をする時は幾らか遊ります、だが他人の世話をするやうな分家をする時は、一文も遊れません、彦九郎が勝手にするが宜しい

祖母「金子は、夫れでも彼れは伊勢崎に行く度ごとには、折々は佐十の許へ立寄つて、お茶の一椀も饗ばれると云ふ、夫れで助けて遊りたいと云ふて居るのだ

專藏「ソレ御覽なさい、彦九郎は何んの爲に其のやうな處へ行きます、學問さへせねば其様な處へ立寄る必要はなく、また伊勢崎へ行くやうな用もないのではございませんか、何んと云つても私しは一文も出せません、彼れが存意のや

うにするが宜しい」と、木て鼻を括つた挨拶でございます、其様な事は勝手に仕ろと云はぬばかりに、俯向いて頻りに帳面を見詰めて居りますから、今はお祖母さんも云ひ兼ねまして、何うも致し方がないから悄々と茲所へ歸つて參りました、此方は食事も濟んで彦九郎は待つて居ります、さて彦九郎に此の事を聞かせまするとと、彦九郎も兄の無情を怒つたが、茲で兄に對つて云ひ爭ふと云ふ譯にはなりませんから

彦九「ねね、お祖母さん、兄さんの事でございますから、大方然う來るだらうと思つたのです、仕方がありません、私しが持つて居りましたら幾らでも惠んで遣るのでございますが、寧そお祖母さまからお祖父様に頼んで頂く事は出來ますまいか

祖母「困つたな、彼の人は浮世の事は棄て、了つて在らつしやるから、何を云うても相談には乘つて下さらぬ、ぢやアお前も一緒にお出で、私が一つ頼んで上げる」

そこで彦九郎を連れまして、奥の離座敷へやつて參りました、老婆さまは側へ來つて、さて隱居の良翁に對し

祖母「彦九郎は斯やうに申しますから、また兄の專藏は堅く取つて出しては呉れません、誠に中に這入つた私しは困つて居ります、貴方に此のやうな事をお願ひ申して濟みませんが、何うぞ彦九郎に少しお持合せがございましたら、遣つて頂く事は出來ますまいか」

良翁「彦、茲へ來なさい、兄さんの言は俯向いて頭は上りません

良翁「彦、茲へ來なさい、兄さんの言葉に背く奴があるか、其様な愚にも付かぬ事で、兄弟爭ひをする事はならぬぞ、其方は其の佐十とやらに何か云つた事がある

と見ねるな、以後はならぬ、此度は之れを持つて行け」と、戸棚から一貫文の錢差を取出しまして、夫れへ出して遣りなさつた、後は前方向いて机に凭掛つて、歌でも考へて在らつしやる

彦九「お祖父様、有難うございます、決して此後は斯やうな容子は致しません、お祖母さま、有難うございます

祖母「サア些と

も早く行つてお出で、また夜更しをしてはなりませんぞ　彦九「ハイ、早速持つて行つて彼等父子の者に悦ばして遣りませう」と其の錢を風呂敷に包んで、彦九郎は之れを携へ、細谷村を飛び出して、足に任せてドシ〳〵駈け出だしましたが、恰度其夜の彼是れ戌刻前、夜道ながら勝手は辨へて居ります百々村の佐十の宅、入口で容子を伺うて見ると、内方では父子の者は其のやうな事とは知りません、煎餅のやうな蒲團を腹の上に載せまして、老爺の佐十は髭を逐々と生やして唸つて居ります、子供などがらもお霜はお粥を炊きましたものと見ねまして、盃の上に茶碗を載せ、輕く一椀盛ひまするとお霜「阿父様、阿父様、チョッと起きて、何うぞお粥が出來ましたからお喫りなさい」先き程から病ひの爲にウッ〳〵と致し居りました佐十は、之れを聞いて熟と此方を振り返り　佐十「オ、お霜、私は何んにも食べたうはないで、何うぞ之れを食べてお呉んなお霜「其様な事を云はないで、何うぞ之れを食べてお呉んな

さい、お前に萬一の事があつては、私は何う仕ようかと、夫ればかりが心配でならぬのでございます、お粥が美味う出來ましたから、マア一椀食べて御覽なさい　佐十「其方の孝行にして呉れるのは、私は決して仇には思ひません、斯うして長らく患うて居るから、子供の其方、米の一粒も手廻す事の出來ない身を持ちながら、何うして其のやうな事が出來る、却つてお前に心配をさせるやうなものだから、最う私は何んにも食べないでも宜い、唯一日も早くお迎ひを待つて居ます　お霜「其様な心細い事を云つて下さるな、阿父様、私も茲で斃ばれますから、お前さんが食べて下さいませんと、私も之れを頂く事が出來ないのでございます　佐十「有難い、其方は夫れ程までに私の事を思うて呉れるのか、夫れでは然う仕ませう、心盡しの其の粥、一口頂きませう」と、漸う老爺は起上つた、入口の戸の側に耳を聳つて、熟と此の狀態を窺ひ、尚も容子を聞いて居りまするとと、茲で父

子は何うやら行平鍋のお粥を啜つて居る容子

お霜「サア阿父様、倘だ澤山ありますから盛ひませうか

佐十「イヤ〳〵最う澤山ぢやがお霜や、其方は十分に食べて置かぬと身躰が弱ると可かぬから、チヤツとお喫り

お霜「けれども阿父様、倘だ澤山あります、

佐十「イヤ〳〵、沈として居る身躰だから是れだけ食べれば澤山だ」お霜は後に殘つたのを漸う浚へて、美味さうに食べて居りまするのを、蒲團に凭れながら少時眺めて居りました佐十は、娘が食べ終つて了ひまして、茶碗だの行平鍋などを片附けやうとして居りまするのを見て

佐十「お霜、夫れが濟んだら茲へお出で

お霜「ハイ……阿父様、何んでございます

佐十「私はお前に此のやうな事を云ふのではないけれども、私は思ひ付いてからは大分日も經つ、殊に伊勢崎の先生もお烏目を持つて行かぬから、お藥は下さらぬ、依つてお藥を頂かぬからと云つても、壽命さへあれば生きて居られるものと、お前を安心させる爲め此間か

ら水ばかり飲で居たが、お前は此のお粥の米を何うして手廻して來なさつた

お霜「ハイ

佐十「イヤ、隱さんでも宜い、私に云うて聞かして下さい、中々一粒の米も今の身分では手廻す事は出來ぬのぢや、私は此儘死を仕ようとも、お前を何うぞ健かに育て上げたいと思つて居た、其のお前に是れだけの苦勞を掛けるや、唯今とても針を呑むやうに心得たが、私が一椀でも食べなければ、お前が食べて呉れぬから、マア我慢をして食べたのぢやけれども此の粥の炊けると云ふのが譯が分らぬではないか、何うして米を手廻しなさつた、遠慮なく私に云はつしやい、縱ひ何のやうな貧しい生活をして居ても、淋しい丁簡を出して下さるな」と云ふのは、佐十は若しも貧に迫つて娘が心得違ひをしたのではないかと云ふ心配でございます、お霜は父の言葉を聞きまして

お霜「阿父様、何うぞ夫れなれば安心をして下さい、決して私は餓ゑて死にませうとも、他

様の物を取るやうな事は致しません　佐十「其様ならお前何うしてお米を持つて居るのかね　お霜「今日ね、阿父様、細谷へ行つて若旦那にお話を致しまして、其様なら近々に見舞うて遣るからと仰しやいまして、お別れ申して歸らうと仕まするとと、一丁ほどす、行止つて見ると、年頃は三十格好の内儀さんでございまして、お前は何うも親孝行の子ぢや、阿父さんが長らく患うて居たら、定めてお粥の一椀も食べる事は出來まい、お小遣金もなからう、サア之れを持つて歸つて何んなりと阿父様の口に適つた物を求めて食べさせてお上げ、然うしたら屹度夫れが藥になるからと云つて、お鳥目を百文下さいました、けれども私しは知らぬ人でございますから、思召は有難うございますけれども私しは尚だ乞食は致して居りません、何うも頂く譯はございませんからと云つて、お返し申したら、イエ〳〵、其様な遠慮はあらない事だと申しますから、其様なら貴方はお方でございますと聞きましたら、私は此の細谷に在らしやる、高山の若旦那様には夫婦ともに、大恩を受けた者である若旦那様へお前は彼の向ふで先刻若旦那と話をして居た側の方で、夫れとなく伺ひをして居つた、依つてお前に對してするのではない若旦那様への御恩返し、何うぞ知らぬ中ぢやないから、之れを納めて置いて呉れいと、其のお方は知つて在らつしやるものと見ねて下さいました、夫れで阿父様頂きましたのでございます其様なら小母さん、貴方は何んと仰しやいまするか、お名前を聞かせて頂きたいと申しまするとと、私はお關と云ふ者ぢやと云つて、其儘畑の方へ行つてお丁ひなさつた、是れと云ふのも若旦那様の息の掛かつた人であればこそ、悦んで頂いて歸りました、其の錢を米に代へて、私も久し振りでお粥を食べたいと一昨日も仰しやつたから、炊いてお上げ申したのでございますか

ら、決して盗みなどを致したのではございません　佐十「ア、然うか、夫れなら宜い、是れと云ふのも高山の若旦那様のお蔭である」と、父子の者は密々話をして居るを、入口にて之れを聞いたる彦九郎は、實に不悶の事よと思ひましたが、最う堪らぬから内へ飛び込んで參ると云ふ、さて此の父子の者は如何成りまするか、次回に、

第五回

エ、父子の者は何んとなく話も濕り勝ち、最と深々として參りましたから、ガラリと表を開けまして、彦九郎は夫れどはなく這入つて參りました　彦九「佐十、居るか、ア、病氣は何うぢやな　佐十「オ、御身は若旦那でございまするか能くお越し下さいました、サア何うぞお上り下さいませ」と云ふうちに、彦九郎は彦九「詳せ」と上り込みまして、突然床の間の前に參り、弓矢の方に對つて兩手を支へ、頭を低げまして、彦九「阿父様、暫時御無禮を致しましてございます、正之は日々壯健にて働いて居りまする、お悦びの程を願ひまする、是れも阿父様のお守り下さいまするゆゑであらうと、誠に有難く心得て居ります、厚く御禮を申上げます、就きましては當家の佐十の病氣全快に及びまするやう、御守り下し置かれまするやう願ひ申上げます」と、再び頭を低げて其の座を起ち、病人の枕元へ參つてピタリと坐つた　彦九「何うぢや、佐十、些と快い方か　佐十「ハイ、有難うございます、お蔭を持ちまして今日は少しな優しかと思うて居ります、ゴホン、ゴホン、ゴホン」と、頻りに咳を致して居ります、其の有様を熟と眺めて居りました彦九郎は　彦九「ハ、ア、此様なに悪いとは乃公は知らなんだ、此頃はチョッと宅の都合で出られぬものであつたから、些とも知らずに居つたのである、今日お箱が知らせて呉れたから漸う分つた

やうな事である、見舞つて遣らなかつたのは済まなかつたな」と云ひながら、片傍に置いた風呂敷を解いて、中から一貫文の烏目を取出し、佐十の前へ差出だしました　彦九「佐十、其方は定めて小遣錢にも不自由をして居るであらう、誠に是れは少いが當分の小遣ひにして、何うか十分に養生をして呉れるやう　佐十「ハイ」之れを見ました時は、堪り兼まして、兩眼から涙をポロ〳〵落しながら、頭を低げまして　佐十「ア、恐れ入りましてございます、何んともお禮の申しやうもございません、若旦那様、是れは御辭退を申上げます　彦九「イヤ〳〵、其様な事は云はずとも宜い、併し伊元へお納め下さるお方でない事は存じて居ります、思召の程は厚く受けまする、父子の者が助かります、有難うございまする　彦九郎は　彦九「コリヤ〳〵、其お霜も有難涙に昏れて居ります、彦九郎は　佐十「有難うございます、私しは此のやうな有難様な事を苦にせんでも、お前は成る可く氣を丈夫に持つて養生が大切ぢや、私はチョイ〳〵是れから訪ねて遣るから、マア安心をするが宜い　佐十「有難うございます、決して此の御恩は死んでも忘れはいい事はないのでございます、其様な事は云はずとも宜い、併し伊致しません　彦九「イヤ〳〵、其様な事は云はずとも宜い、併し伊勢崎の稲井と云ふ醫師は甚だ不埒な奴、是れから乃公は伊勢崎の方へ行くから、一應立寄つて、お前の計へ來るやうに屹度乃公が談判をして遣る　佐十「有難うございます、何分にも私しも熟〻と考へて見ますると、此のやうな陋苦しい處でございますから、先生様の見舞つて下さいませんのも、無理のない事と、私しは最う諦めて居るのでございます、實は龜井先生様よりは若旦那様にお顔を見せて頂きましたなれば、何よりも私しに取つては有難く心得まして、病ひも癒るやうな氣持ちが致します、最う是れからは決して愚痴などは飜しません、何うぞ若旦那様御心配下さらぬやうに願ひます、就きましては愚痴なやうではございますが、若旦那様があればこそ斯うやつて生きて居も

れまするやうな事でございます、實のところは唯今も夫れを申して悅んで居りましたのでございます、今日も娘のお霜が若旦那樣にお別れ致して、道を急いで歸らうとすると、後の方から頻りに呼ぶ人があつたさうでございます、何方か知らぬと後方を振り向いて見ると、夫れが三十格好のお女中ださうでございまして、お前は年齡も行かぬに阿父樣の病氣を世話すると云ふのは、感心な者だと種々親切に仰しやつて下さいまして、其上お鳥目を百文も下さいましたが、だがお霜は何うも知らぬお方からお貰ひ申すと云ふ譯にはなりませんからと、種々とお斷りを申上げました、ところが其のお方は、私も高山の若旦那樣に御恩を受けた者だ、決して遠慮は要らぬから、若旦那樣に御恩報じをすると思つてお前に上げるのだ、依つて何うか默つて受けて貰ひたいと、無理に下されましたさうでございます、夫れで其のお方のお名前を聞きましたら、私はお關と云ふ者であると

斯やうに仰しやつたさうでございます、娘も安心をして立歸りましたが、私やアッヒ一昨夜、何うか久し振りで米のお粥を食べたいと、無理な事を申したことがございます、子供ながらも夫れを思ひ出して態々米を買つて呉れまして、唯今漸う粥を炊いて私しに食べさして呉れました、ですから其の事情を聞いて安心をして、其の弱を頂きましたやうな譯、是れも全く若旦那樣のお陰と、實に悅んで居りましたやうな事でございます　彦九郎「ア、左樣か、イヤ彼の者なれば受けて置いても構はぬ〳〵、成る可く力を付けて早く快くなるのが宜いぞ」其夜も彦九郎は伊勢崎の先生の許へ參ると云ふ心算ですから、其場は忽卒にしてお霜に對ひ　彦九郎「夫れではお霜、如才なく阿父さんを大切にせよ　お霜「有難うございます」父子の者に別れを告げて、彦九郎はドシ〳〵街道筋へ引返し、恰度伊勢崎へ這入つて來ましたのは、最う亥刻前とも覺しく、松本先生のお宅の少し手前でございま

して、彼の龜井と云ふ醫師の宅の前を通り掛かりましたが、尚だ入口は開いてございまして、何うやら起きて居る容子でありますから、偶と思ひ出した彦九郎は、ズイッと夫れへ這入つて參りました　彦九「御免、チョッとお頼み申す」　書生「ハイ、何方でございます　彦九「拙者は先生夫れへ出ましたが　書生「ハイ、何方からお出でになりました　彦九「私は に面會を致したく參つた者でありますッ、チョッと先生に然う申して呉れぬか　書生「ハイ、何方からお出でになりました　彦九「私は細谷と云へる處に住居をして居る、高山と申す者でござる」　大變に怖ろしい年齢も行かないのに可怖い顔をして居ると思ひまして　書生「何の御用でお出でになりました　彦九「實は先生に會つたら分る、少し頼みたい事がある」　書生は仕方がないから奥室へ參つて此の事を申入れまするとと、何んぞ病氣の事に就て來たのであらうと思ひ、驚て龜井と云ふ先生は玄關先きへ出掛けて參りました　玄澤「サア何うぞ此方へお這入り下さい、コレお茶を持

つて參らぬか」　下女は夫れへ茶を汲んで持つて出る、座蒲團と云ふ待遇でございます　彦九「イヤ〳〵、構つて下さるな　玄澤「是れは初めてお目に懸かります、私しは龜井玄澤と申す者でございます、して何の御用でお出でになりました　彦九「何うか先生、お見知り置かれまするやう願ひまする、私しは當町内の松本先生の許へ度々參つて居りまする門人の一人、高山彦九郎と申す者でございます　玄澤「ハイ、して御用の次第は　彦九「先生、今夜參つたのは他の事でもありません、エ、百々村の百姓佐十の事に就きまして、お願ひに參つたのです　玄澤「ハイ……」　變な顔をして居りまする　彦九「先生、貴方は一度佐十の處へ見舞つて下されたさうですね、ところが夫れから後と云ふものは、先生の方には御多用と見ねてお見舞下さらぬさうで、彼れは赤貧の身で、彼のやうな生活をして居りまするやうな者でありまするが、人間は至つて正直な者であります、併し何う云ふものでお見舞下さ

る事が出來ぬのであります、醫は素より仁術と云ふ事は、是れは我々が申さずとも貴下方はお職柄で御存知でありませう、偶には彼のやうな病人が出來ましたら、私しの方から願ふまでもない、施藥の一つもお遣りなさつて下さつてこそ、伊勢崎の龜井先生かとも思はれまする、全躰その施藥と云ふ事は出來ぬものでございまするか、今日は貴方の御丁簡を伺ひたいのでございつたのです、老爺の病氣を癒して遣つて下さる事は出來ますまいか、矢張り烏目を持つて參らんければ藥は下さらぬのですか「龜井先生は此の勢ひに懲いて了ひました「オヤ〳〵、大變な勢ひである、此奴は迂乎り餘計な事を云つたら、何樣な事に立到るかも知れぬ」と思ひまして、何しろ此の伊勢崎の松本の方へ來る書生なれば、どうせい議論の一つも持ち掛けやうとするに違ひない、敬して遠ざけるより他はないと思ひ、龜井先生は莞爾笑つて　玄澤「イヤ、是れは〳〵、夜中貴方にはお出で下さいまして、有難うございます、如何にも貴方の仰しやる通り、醫は仁術、決して私しは佐十を見舞うて遣らぬと云ふのではありません、尤も過日佐十の宅へ參りまして、是れなれば急に變の來る急病と云ふではなし、結局年齢の加減から發つた病ひ、夫れですから藥を充てがうて置きまして、マア是れなれば三日四日はあるであらうと思ひまして、其後見舞うて遣らうと思つて居りまするところが、何分此節は患者が非常に多いのでありまして、夫れゆゑ病家先きへ代脈の一つも出して居ると云ふやうな事で、實に恩老も手が廻り兼るのでございます、マア大抵彼れの方から何んとか云つて來るであらうと思つて居りましたが、藥を取りに參りませんところを見ると、餘程快い方になつたのであらうかと、ツヒ他の方へ手を引かれて居りましたのでございます、イヤ、何れ然う云ふ事なら、明日でも見舞つて遣りませう　彦九「先生、然うぢやアない、藥は彼れの娘が取りに來

て居りませう、けれどもお前さんの方では、薬が欲しければ鳥目を持つて來い、鳥目がないと薬を遣る事は出來ぬと仰しやつたさうである

玄澤「ヘイ、誰が其樣な事を申しました、夫れは何彼の間違ひでございませう、思老が宅に居りましたら、左樣な事は決して申させは致しませんが、大方弟子共が何つか他の思ひ違へたのでございませう

彦九「左樣か、イヤ、其樣な事で者と間違へたのでございますから、彼あらうと思ひます、豊夫本人は貧乏に暮して居りますから、彼あの云ふ處へ薬を盛つて遣つたら倒されるから、行かぬ方が優だと云ふやうな、其のやうな先生ではあるまいと私しは思つて居ります、若しも貴方が然う云ふ精神のお方なれば、茲で一議論いたさうと思つて參りました

「オヤ〳〵大變な奴がやつて來た、険呑々々、彼やうな者に相手になると大變だ」と思ひまして、頻りに彼れを敬して遠ざけるやうに致して居ります、だから彦九郎も是れは幾ら厳しく云つたところが同じ事、唯當人を助けて遣れば宜いのです、ところへ明日見舞つて遣らうと云ふ口上が出ましたから

彦九「おやア、先生、貴方佐十を見舞つて遣つて下さいまするか

玄澤「如何にも見舞つて、薬も十分に充てがうて遣ります

彦九「左樣ですか、ちやア何分佐十に成り代つて、高山彦九郎がお願ひ申します

玄澤「承知いたしてございます

彦九「左樣なら、夜中出掛けまして大きにお邪魔を致しました」と、屑で風を切つて大手を振つて出て行つて了つた、早速書生に申付けて入口を閉めさせ

玄澤「サア、お前達は早く表の戸締りが出來たら寝るが宜い、彼樣な者が飛び込んで來て、飛んでもない目に遭はうとした」と、其儘井の方は寝込んで了つたが、中々見舞つて遣る氣はございませんで、彦九郎は相變らず其夜は先生の許へ參つて、稽古が濟みますと立歸りました、夫れから後と云ふものは三日に上げず佐十父子の者を訪ねて遣ります、金錢と云つてはないのですが、此の佐十の宅の生活の、狀態を見まし

ては、お祖母さまにお願ひ申しては、或ひはお米であるとか、種々な物をチョイ〳〵持つて參つては見繼いで遣り、成らぬ世話をして遣つて居りましたが、佐十父子は此の情けに依つて、彦九郎の來る度毎には伏し拜み、私し等父子の爲には神佛であらうかと悅んで居りました、妙なもので氣の故か、今は老爺もプラ〳〵と、一時から見ると餘程快い方に赴いて參りました、けれども年齡の故でございまするか、全然全快とは參りません彦九郎は半分は學問の稽古、半分は叔父さんの手許へ立寄つて擊劍柔術の稽古をして、十分其の腕を固めるのでございます、其のうちに今日と過ぎ明日と暮す間に、追々年齡を重ねて參りましたが、漸う彦九郎は本年は十八歲と相成つて參りました、至つて身躰は肉附きまして、身長は六尺二三寸、細谷では彦九郎に續く若者は一人もない位ゐ、今は劍道柔術の道も餘程上達いたしまして、叔父の劍持長藏も折々は彼れが爲には打られる

位ゐでございます、先づ彦九郎も是れほど鍛練を仕て來たら結構であると思つて居りまする、彼れの參る度毎には折々申聞かせまするには、學問も上達し、また武術の腕前も相當に出來て來たら、是れからは國々を廻り、勤王の志厚き人達を訪ひ、卒ざ事ある時は天朝の御爲め御奉公を盡し、天晴れ先祖の志を貫かねばならぬと云ふ事は、叔父の長藏も申せば、自分もまた其の考へで居るのでございます、そこで密かに叔父の長藏と相談を致したのであります、何しろ宅には兩親もない、祖父さん、祖母さんの事でございますから、ア、夫れは宜い事だと云つて話は聞いて呉れますが、一人で此の生れ故郷を出しては呉れません、夫れゆゑ何時か國を抜け出ださんければならぬと云ふので、其の拔け出だす折を考へて居りました、ところが恰度或日の事、大分此頃は寒くなつて參りましたけれども、彦九郎は元氣に任せて伊勢崎の先生の許よりの歸途、一棟の辻堂がご

います、其の前までやつて來ますると、ピタリと叔父の長藏に出會ひました、と云ふのは今日は叔父は隣り村に用事がありまして、夫れへ參つての歸途、身には蠟色鞘の大小刀を横たへ、小倉の袴を穿き、手に鐵扇を握つて、今宵の月の景色を眺めながら此方へやつて參りました

長藏「オ、彦九郎か、何方へ參つた

彦九「ハイ、是れは叔父様でございまするか、先生の許へ參りました、ところが生憎今夜はお留守でございまして、お稽古は休みでございます、徒足を致しまして今から宅へ歸らうと思うて居ります

長藏「ア、恰度好い處であつた、マア〳〵、茲へ掛けよと、片傍の縁側に腰を掛けました

長藏「何うも今宵は好い月ではないか

彦九「左樣でございます、全然畫のやうでございます、併し叔父さん、大分夜も更けて居るやうでございます、今夜はお稽古もありやア仕ないのですから、夜のうちに歸りたいと思ひまする、宅ではまたお祖母さまが、今頃何しに歸つたのかと心

配なさるでございませう

長藏「イヤ〳〵、お祖母さま一人の心配ではない、其方その覺悟があるか之れを聞いて彦九郎は思はず夫れに兩手を支へ

彦九「叔父樣、私しも豫て覺悟は十分に致して居りまする、其の覺悟とは夫れこそ御先祖の志を貫くのでありまして、新田義貞公決然として義の爲に立たれましたのは、當時の御代に能く似たところがあるやうに思はれます、御先祖が志を堅くして新田殿の御手に附かせられた頃は、諸國に勤王家の武士が數多蜂の如く起つて、大義を唱へた形蹟もございますると、實に殘念でならぬやうに思然るに今の世の有樣を見ますと、人傳に聞いて居りまするが京都の御所の御狀態でございます、聞けば胸も裂けるばかりの心地が致しますと云ふのは、私しは今は百姓の家に居りましても、御先祖の血は受け繼いで居りますから、何卒して遠江守樣の志を繼ぎ、一天萬乘の大君の御爲に一命を擲ち、お役に立ちたい心算でございまして

其の事は十分覺悟を致し居ります、依つて折があつたら宅を飛び出したいと、斯やうに心得て居るのでございます、だが唯私しの心に懸かるのは、何分お年齢を取られました、お祖父様、お祖母さまを振り棄て、他國へ出て勤王家を説いて廻るのでございますから、其の間は孝道が欠ける事であると、夫れのみを殘念に心得まする

長藏「イヤ、夫れなれば心配を致すな、乃公が十分見廻つて遣る、また兄の專藏も居るし、だから其邊は心配仕なくつても宜い、依つて汝は是れから其の志を遂げたいと云ふに就ては、一つ決心の上諸方を遊説をして廻れ、忠義奉公の爲とあれば、見事火の中、水の中へでも飛び込む氣になつて遣れ

彦九「夫れは勿論です、私しの一命は見事君に差上げる心算です

長藏「だがぬね彦九郎、心ばかりあつても身躰が夫れに伴はなかつたなれば可かぬぢや、一命を差上げるだけでは、忠義奉公を全くする事は出來ない、貴樣に大丈夫その覺悟と云ふもの

がなくてはならぬ

彦九「あります、私しの身躰は鐵です」と云ひながら、腕をバチ〳〵叩き始め

彦九「此の通り、手足は石でございます

長藏「ムゝウ、雨にも風にも凌ぎ、寒中も薄着で石上で臥すと云ふ氣でないと可かぬ、一番試して見よ、今から宅へ歸るには及ばぬ、依つて今宵は此の辻堂の縁側で一夜を明かせ、乃公は是れから細谷へ行つて、老母さんに内々頼んで來て遣るから

彦九「ハイ、ぢやア私しは今から歸りませんでも宜い〳〵

彦九「夫れでは茲で一夜を明かしますから、叔父さん、宅のところは宜しくお頼み下さるやう」亥刻廻つた頃でございましたが、長藏は茲で彦九郎を勵まして置いて、細谷の宅へスタ〳〵と行つて了つた、其後にて彦九郎は其儘縁側へコロリと横になりました、月は其方へ差込んで參りました、懷中から本を取出して、寒ながら月の明かりを燈火に代へて讀み始めた、少時すると胸の邊りに本を置いて、雷の如き鼾を發いて、大膽

な男もあるもの、十月の下旬で餘程寒いのでございまするが、其樣な事には頓着なく途に寢込んで了ひましたが、此方は長藏細谷へ參つて、お元と云ふ我が母親に對ひまして、内々話込み茲で其夜は泊り込んで、夜のうちから別れを告げ、自分の宅へは歸らずして、再び此の辻堂へ來て見ると、彦九郎は大膳にも此の裏空に仰向けになつて、雷の如き鼾を發いて寢て居ります側へ來つて、此の有樣を眺めました長藏「豪らい奴だ、此樣な大膳な事をするやうでなければならぬ」と思ひまして、茲で彦九郎を起しまするとと、偶と目を覺ました高山は彦九「オ、叔父さんでございまするか　長藏「ムヽウ、サア乃公と一緒に來い、宅へ行つて何彼と話をして遣らう　彦九「ちやア行つても、お祖母さんはお叱りはございますまいか　長藏「大丈夫々々、乃公が話をして置いたから」そこで伊勢崎の自分の仕家へ連れ歸つて、近々の うちに當國を彦九郎を立たせると云ふ、秘密に何彼の話を致し

ました、別に何處と云ふ的はないのですけれども、唯諸國を遊說に廻つて彼れが志を達するやうに仕向けたのであります、されば明和元年十月下旬の事でございました、叔父と申し合はせた上、遂に其の翌月となつて、十分支度が出來ましたが、叔父は之れを承知して居りまするが他の者は誰も知りません、宅へ一通の書置を殘しまして「一書を以て申上げ候、私事未だ學問未熟にして、其の奥義を得ず、依つて京學に罷出で候、尤も此儀お願ひ申上げたく候へども、却つてお止め下さると心得夫れゆゑ密かに罷出で候、京都には知人之れあり、其人を便り、茲一兩年の間留學を遂げ、其上立歸り候間御安心下されたく候、また帶刀は學者の法に候へば、是亦た無斷にて倉中にある御寶備前兼光の刀、菊一文字の脇差を取出だし、之れを佩刀仕つり候、何卒此の御寶拙者に餞別として下し置かれたく、御祖母樣兄上樣へ、宜しく御願ひ下されたく、御願ひ申上げ候、十一月

今夜、御祖父様、彦九郎」斯く認めて置いて、大膽にも今までは自分の郷里から外へ出た事のない身が、茲に數百里の旅をせんとして、愈々國許を出立いたすと云ふ、彦九郎、志を立つて郷關を出づるの條、チョッ一息、

第六回

彦九郎は我が居室にて一通の書置を認めまして、之れを自分の机の上に載せ、密かに宅の倉へ這入りましたが、勝手を辨へて居りますから、兩刀を取出だしましたが、誰も氣の付かぬうちにと、自分は支度を致して、小倉の袴に黒紋附、足拵へも嚴重に致しまして、チョイと着更へを一枚風呂敷に包んで連尺に背負ひ、密かに宅の裏口より飛び出だしたのでございます、幸ひ誰も氣が付かぬ事でありますから、恰度今日が暮れたばかり、ホッと太息を吐いて後方を振り歸り、我が宅の有様を少時見て

居りましたが、彦九「お祖父様、暫時私しはお暇を頂きます、一雨年いたしたらまた〳〵立歸つて參る事でございます、お祖母さま、御機嫌宜くお暮しあそばしまするやう」と、少時の間は大丈夫な男でございますが、何分自分の生れた土地を離れるのでございますから、何んとなく後髪を引かれるやうな思ひでございました、其のうちに思ひ切つてドシ〳〵道を急ぎましたる事でございます、細谷の里を離れまして、今里の外れの森の處へやつて參りますると、横合の處から一人の男がドシ〳〵此方へやつて參りました、恰度此の森を曲らうと致したところで、互にビッタリ出會ひました、ハッと思ひまして高山は一足後へ下つた、此の男は目敏くも之れを見まして

男「オ、若旦那様ではございませんか」と云ひながら、チョ〳〵と其の姿を眺めまして、不思議さうな顔をして居ります、彦九郎は

彦九「オ、手前は兵吉ではないか、イヤ誠に久しく會はぬ事であつたが、何う

ちやな、其後は無事に稼いで居るか　兵吉「有難うございます、私しはお蔭さまにて、唯今では三四年前とは生れ変つたやうな人間となりまして、酒も全然止めて了ひました、素より賭博も断つて了つた事でございまして、お蔭さまで真人間となりましたやう評合、夫れですから村に於ても人中へ漸う出られるやうになりました、是れと云ふのも全く若旦那様の御異見が私しの身に染み込みまして、漸う真人間にして戴きましたので、實に若旦那様、貴方の事は片時も忘れた事はございません、夫れですから宅の奴も大きに悦びまして、實は夫婦は貴方様のお名前を認め、夫れを神棚へ祀りまして、朝夕お燈明を點げて拜んで居りまするやうな譯でございます、今では大丈夫でございますから、若旦那様、御安心の程を願ひます　彦九「然うか、夫れほどに心を入れ變へて、真人間になつて稼業に精を出して居ると云ふのは、何より結構ぢやな、兵吉「お蔭さまで美味い御飯を漸う頂けるやうになりました、夫れですから夫婦の中も睦まじく暮して居ります、今では大きに兩人とも悦んで居りまするやうな事でございます　彦九「イヤ、夫れは重畳ぢや、乃公は此頃は一向に佐十の許を訪ねて遣らぬ事であるが、彼れの許で聞いて見れば、手前の家内のお關には其後種々と親切に訪ねてやつて呉れるさうである、能く世話をして遣つて呉れるな、して此節佐十の容躰は何うぢやな、貴様は知らぬか　兵吉「へイ、佐十でございまするか、彼れは矢張り宅に寢て居ります、私しもお關から話を聞きましたものですから、何んでも彼れを助けて遣りたいと思ひまして、折々は佐十の許を訪ねて遣りますが、何分若旦那様のお目の掛けられた人間でありますから、他人のやうには思はれません、けれども金銀の世話と云ふものは出來ませんが、マア米だとか麥だとか云ふやうなものを、折々に持つて行つて遣りまするやうな事でございます　彦九「夫れは〳〵、能く世話をして

遣つて呉れる、大きに彦九郎も有難く思ふぞ、大躰彼の佐十父子と云ふ者は、私を杖柱と憑みにして居る正直な者である、私が若し遠くへ參つたと聞けば、アノ佐十は力なく思うであらう

兵吉「エヽッ、何んと仰しやいます、若旦那様、私しは最前から貴方の其のお姿を見て居りますが、何うやらお旅行をなさいまする御容子ですが、何方へお出でなさいまするのでございまするか

彦九「イヤ別に是れと定つた事もないが、些と此方も志すところがあつて、西國筋を遊歷するのである

兵吉「ヘイ、西國の方へ、夫れは何うも大變でございまするね、何時お立ちになりますか

彦九「今から立つのだ

兵吉「今から、餘う性急ではございませんか

彦九「夫れだに依つて私が立つて行た後で佐十が之れを聞いたら、定めて力を落すであらうと思ふ、何うか貴樣は私に成り代つて、彼の父子の者の世話をして遣つて呉れい、此方から頼むから

兵吉「ヘイ、夫れは承知いたしました、大變に急の御旅行でございまするね、若旦那、夫れには何か仔細のある事でございいますう

彦九「イヤ〳〵、別に何も仔細と云ふてはない、唯乃公は見ぬ處をブラ〳〵見物をして來ようと云ふだけの事であるのだ

兵吉「若旦那……」と、少時の間顏を眺めて居りましたが、思はず兵吉は涙に昏れまして

兵吉「夫れは貴方水臭いと云ふものでございます、私しは是れほどに思つて居りまするに、貴方は私しの心を疑しもお察しは下さいませんヽ何故そのやうに物をお隱しに相成りまするか

彦九「是れは怪しからぬ事を云うではないか私は物心が付いてより嘘を云つた事はない」

兵吉は少時考へて居りましたが

兵吉「若旦那樣、唯今から御出立になると云ふのは是れには何か仔細のある事であらうと思ひます、私しは若旦那樣のお身上をお察し申上げます

彦九「ナニ、何う察して居るのだ

兵吉「ヘイ、夫れは若旦那樣の御氣象と專藏樣の御氣象とは、全然天地の相違、事に依ると貴方は何か專藏樣と……

彦九「コリヤ

〳〵、何を満らぬ事を云つて居るのちや、兄上の事を兎や角申すな、何も此方は兄上と喧嘩をしたと云ふやうな事はないのである、兄は父の遺産を受けて農業を勵んで居られる、私は弟の身上であるから、何れ國に居つたところが、將來は何方へか分家でもする身上、賊に氣樂な者であるから何處へでも勝手に行き仕第、決して兄上と爭論などと云ふ事は露聊かも致したのではないから、安心を致せ　兵吉「へイ、若旦那様、私しは貴方に大恩を受けました者でございますから、貴方のお蔭で人の中へ出まして、口の一つも利けるやうになりました、貴方のお爲めなれば何様な事でも致します、例へば火の中へ飛び込めと仰しやいますれば、見事飛び込みます、何うか其の今宵家出をなさる事情を、私しの安心の爲にお聞かせなさつて下さいませ　彦九「可怪しな事を云ふな、決して何の仔細もないのちや、夫れは其方の思ひ違ひである、唯此度の旅行と云ふのは、唯今も申した通り、知らぬ他國を見物をして廻らうと云ふだけの考へだけれども、何分留主中はお祖父様やらお祖母さまは、御丈夫なお方であるとは云へどお年齢がお年齢であるから、兵吉、手前は私に成り代つて、お祖父様やお祖母さまの身上を守護いたして呉れい、是れだけは手前に頼んで置くから　兵吉「へイ、宜しうございます、乾度お宅様は除所ながら見廻りまする事でございます、其邊は御心配のないやうに願ひます　彦九「ム、ウ、ア、大丈夫の其の返答、乃公も之れを聞いて滿足に思ふ、お前は無事で暮して呉れよ、之れで別れると仕ようが、宅へ歸つたらお關にも宜しく云つて呉れい　兵吉「ハイ、左様に申しますでございます隨分お氣をお附けあそばしてお越しなさい」と、何んだか自分は別れともない容子でございます、此方は彦九郎、其様な事には頓着はない　彦九「ちやア、茲で別れるから」と云ふので、見返りもせず、其儘ドシ〳〵足に任せて行つて了ひました、後姿を

眺めた兵吉は「アヽ何うも若旦那が今宵家出をあそばすと云ふのは、何うも合點が行かぬ、何分兄さんは彼のやうな客嗇であるから、事に依ると專藏さんと何か喧嘩でも遊ばしたのであらう、顔はチヨッと可怖い顔をして在らつしやるけれども、本當に御氣象は朗かな方だ、何うぞ早くお歸り下されば宜いが」と少時の間は後姿を見送つて居りましたが、應て是れから自分の宅へ歸つて了ひました、彦九郎は足に任せて伊勢崎の方へドシ〳〵やつて參りました、是れから伊勢崎の町へ這入らうと云ふ手前に、一棟の地藏堂がございます、其の地藏堂の前まで來ると、お堂の前の縁側に腰打掛けまして、スパリ〳〵と煙草を喫んで往來の容子を眺めて居る者があります、其の前を通り過しますると「彦九郎か」と聲を掛けましたので、高山は振り返りました

彦九「オヽ是れは叔父様でございますか」

長藏「オヽ彦九郎、先刻から茲へ來て待つて居つたのだ、約束通りお前今から出立する

のか」

彦九「ハイ、エヽ是れから出立いたさうと心得まする、誠に濟みません、出まする時にお祖父様やお祖母さまにお暇乞ひを仕たいと思ひましたが、却つて止められてはならぬと思ひまして、無斷で裏からソッと飛び出したのでございます」

長藏「然うぢや、然うでも仕なければ納まりが附かぬ、別に何も忘れものはないか」

彦九「ヘイ、マア大抵手廻りの物は持つて出ましてございます」

長藏「併し彦九郎、是れから其方は上方の方へ參つたれば、十分目的を達して來いざいます、仰せまでもなく私しは一人でも多く正義の友を集めまして、十分にやる心算でございます」

長藏「夫れは何より結構、用意のものは持つて居るか」

彦九「ヘイ……」

長藏「用意のものは持つて居るか」

彦九「ヘイ、滿らぬ大小刀ですが、實は是れは恐れ入りましたが、常々お祖父さんのお言葉に、將來は其方に讓つて遣るからと仰しやいまして、土藏に納つてありました其の大小

刀を、無斷で取り出だしましたやうな事でございます、マア是れさへあれば私しの魂でございます、之れを貰つて參る心算でございます　長藏「夫れは手前の身を守る大小刀ではないか、用意の物を持つて居るのかと云ふのちや　彦九「用意の物と仰しやいまするのは　長藏「然うではないか、用意の物と云ふのは、路用を持つて居るのかと聞くのぢや　彦九「路用、夫れは少しも持つて居りません、兩刀を取出だしましたさへも、兄様に對して氣が咎めるのでございます、殊に金子は今兄が家督を致して居りますれば、皆兄の物でございまして、夫れを無斷で私しが持ち出したと云ふ事になりまする、所謂賊になります、ですから決して金子には目を懸けません、着更へ一枚と夫れから兩刀を身に附けただけでございまして、是れだけあれば大丈夫でございます　長藏「夫れは何うも其方は大丈夫であらうけれども、然う他國へ參つては自由になるものではない、俗の語にも、裸で道中がなるものかと云ふ事があるではないか、夫れでは之れを持つて行け、餞別に遣はす」と、路用の金子を胴卷に入れたまゝ、夫れへ差出だしました　彦九「叔父様、有難うございます、けれども私しは叔父様金子には不自由は致しません、ナニ、此様な物はございませんでも……　長藏「馬鹿な事を云へ、縱ひ手前が其の正義の友に出會ふにしたところが、夫れまでは用意の金子と云ふものがなくては、道中の出來るものではない、萬一の時の用意だから、之れを持つて行け　彦九「左様ですか、夫れは何うも何から何までのお心添へ、恐れ入りましてございます、然も此様に深山に　長藏「イヤ〳〵、夫れだけ持つて行け」そこで金子を推戴いて、此の胴卷を十分に懷中に卷き納めました　長藏「夫れでは最う夜も更けるから茲で別れると致すが、道中は隨分氣を附けて行けよ　彦九「有難うございます、叔父様、何うか私しは貴方におお願ひがありまするが、唯私しの心に懸かると云ふのは、宅のお

祖父様お祖母さまの事でございます、何分にも私しは居りませんのですから、留守中は時々お見廻りの程を願ひたうございます

長藏「イヤ、夫れは心配いたすな、屹度後は乃公が両親を見廻る事であるから、宅の事は構はず安心をして行け」

彦九「有難うございます」長く話を致し居りましたが、最う冬の夜ながらも拂曉近くなつて参りましたから、茲で別れを告げまして、高山彦九郎は道中筋の方へ出ました、

第七回

さて彦九郎は東海道を志して出掛けて参りましたが「待てよ、王城の土地を見る前に、一遍江戸表の容子を見て遣らう、何云ふ状態であらうか」と思ひましたところから、江戸の方へ這入つて参りました、何しろ日に歩み夜に泊まりまして、早くも江戸へ着いたしますると、將軍家の膝下で、江戸は八百八町、

四里四方、其の繁昌と云ふものは實に大したもので、大名屋敷は申すに及ばず、或ひは高家旗下の其の屋敷の有様を見ても分ります、彦九郎は馬喰町に宿を取りましたが、別に是れと云ふ用事があると云ふのではないから、毎日市中を廻つて見物を致し居ります、其時の將軍様と云ふのは、十代の將軍、德川家治公でございまして、中々御威勢は盛んなものでございます、殊に當時の老中と云ふのは、田沼主殿頭、此の仁は頗る壓制極まる人物でございまして、隨分下様から賄賂進物を取るのを自慢のやうに致して居ります、田沼と云ふ仁は町人百姓から賄賂を取るばかりではない、中には大名方からも取ると云ふので、其の時分に大名縞と云ふ縞に、紬がチョイ〳〵飛んだ縞を拵へまして、下様では之れを田沼縞と稱へました、田沼と云ふ人は細かくかすりを取ると云ふところから、之れを呉服屋が賣り出すと、非常に其の時分に流行いたしましたのでございます、或時

呉服屋の手代が此の田沼縞を風呂敷に包みまして、田沼様の臺所へ商ひに來ました、其時家來は　家來「コリヤ〳〵、此の縞は何んと云ふ縞だ」云はれた時に若い者は困りました、正歟是れが田沼縞とも云へず、少時考へて居りましたが　若者「へイ、是れは御當家縞と申します　家來「何んだ、御當家縞だ、世間で噂をする田沼縞と云ふのは是れか　若者「へイ　家來「噂に承まはれば大名の掠りを取ると云ふ意味から、斯う云ふものが出來たのぢやな　若者「へイ、サ左樣ださうでございます　家來「夫れでは今日は之れを掠り取つて遣るから、然う思へ　若者「其樣な殺生な事がありますか　家來「イヤ、是れが當家の法だ」大變な法もあればあるものです上の行ひが惡ければ下樣の奴まで此のやうな事をすると云ふ、正歟是れほどまでの事でもありませんでしたらうが、上に立つた老中が總て賄賂進物を取らうと云ふやうな事でございますから、夫れに連れまして隨分此の德川の政治と云ふものは亂れて

參りました、殊に大手前などへ參つて式日の登城を見ましても齒を咬緊つて怒つて居ります、

彦九郎に於きましてはバリ〳〵

夫れですから、下座をすると、云ふやうな事も仕ない、行列などが通ると脇み附けて居ります、素より德川幕府の歷制を憎む云ふのは、子供の時分から太平記其他の歷史を讀んで大きくなつた人間でございますから、昔に比較して見れば、德川家康と云ふ者は、先づ昔の足利氏、三代將軍家光は足利義滿、然う云ふやうな心地がする、實に東武の役人共は奢り增長いたして、皇室に對する有樣と云ふものは、宛然足利家代々の致し方の如く思はれる、御所の今日の御有樣は實に幕府僭上に依ると、こゝ、皇室の御爲めには滿身の生血を絞りても惜しいとは思ひませぬど、彼れ德川家の榮華の上に對つては、尿するのも他き足らぬ程に思つて居ります高山の事でございますから、此の江戸に逗留しても面白くはありません、凡そ一ケ月ばかり逗留

して居りまするうちに、諸大名の有様など大略見物を致し終りましたし、そこで此地を出立いたし、東海道筋を京都の方へ、ドシ〳〵出掛けて參りましたのでございます、至つて足の健な人でございますから、大概日に十五六里の道は大丈夫、僅か六七日にして京都へ這入つて參りました、恰度三條の大橋の處までやつて參りまするとと、往來の者に對ひまして　彦九「オイ〳〵、チョッと物を尋ねるぞ　○「ハイ、何んどすね」と振り返つて彦九郎の顔を見ましたが、怖ろしい可怖い顔をして居る武家もあるものだと思ひ、可怖ながら打眺めて居りまするとと　彦九「茲は京都と云ふ處か　○「然うどすね　彦九「して皇室は何方の方に在ますか　○「ハイ、皇室と云ふのは何んどすね　彦九「怪しからぬ事を云ふ奴もあるもの、恐れ多くも一天萬乘の帝の在す處は、何の遠の方角に當るかと云つて尋ねて居るのぢや　○「ア、御所どすか夫れなれば此の向ふに見ねます、彼れがお天子様のお在でなさいまする處どす」と、指しを致しました時、彦九郎は今恰度橋の中央までやつて來ましたが、夫れを見るとビタリと橋の上で坐つて了つた、往來をして居る者は驚きました「オヤ〳〵、此の人は何んであらう」と思つて居りまするとと、彦九郎は橋上から御所の方を打眺めまして、橋の板に兩手を支へて頭を低げ、何か情に迫つて涙に昏れて居りまするところの容子、何を云つて居るのか、往來の者には薩張り分りません　△「チョッとお見彼のお方は何う仕なはつたんぢやらうかるもの、是れは氣違ひではなからうか」と、大勢の者は思ひましたが、正歟武家でございますから、側へ來つて聲を掛けは致しませんが、不思議な顔をして見て居ります、此方は少時の間左様な事には更に頓着なく、涙に昏れて眞に恐れ入つて居りましたが、漸う姿勢を端めまして、直に是れから其の皇居の方角へ對して出掛けるのでございます、漸うの事で其の足で蛤御門

の處までやつて參りまするとて、御所の御有樣を少時の間打眺めて居りましたが、實に以て淋しきところの狀態でございますから、何んとなく彦九郎は涙に昏れ、少時の間佇んで千萬無量の思ひをなして見惚れて居りました、其のうちに公卿または殿上人が參内をなさいまする、其のお姿を見ると、中々御立派なものでございまして、身には位冠裝束をお纏ひに相成りまして、お姿を見れば御立派でございまするが、何んとなく活氣と云ふものがございません、此の狀態を熟々と眺め「ア、甚ら い違ひなものぢや、江戸の者は先づ誓へて云はうなれば生鰹と云ふやうなものだ、生々としてはねる繰り廻つて居る、京都の人は夫れに引替へ、小な鉢の中へ入れられた金魚鱗臣に等しく、唯美しいとばかり、別に是れと云ふ活氣もない、殿上人の有樣は斯やうなものであるか、アゝ皇室の御事が思ひ遣られる、是れと云ふのも、江戸の將軍奴が壓迫なし、雪に押さる、若菜の如きで

あると、少時の間は齒を咬緊つて無念の容子でございましたが出入りをする殿上人の姿を見ては、何か頻りに考へて口の中に呟々く云つて居りまして、折々は涙に昏れると云ふ有樣でございますから、通り掛かりまする人々は、此の人は何んであらう妙な人もあればあるものと、皆々不思議に思つて居りまする事でございます、併し然う何時までも茲に佇つて居る事は出來ませんから、さて此の京都へ參りましたれば、自分は先づ此地に暫く足を留めて、學問に心を寄せやうと云ふ考へであります から、何處かへ宿を取らんければなりません、國を立つ時に考へて居りましたのは、豫て此の京都の夷川に上州屋源兵衛と云ふ町人がございまするが、此の上州屋と云ふのは、以前は細谷村に生立ちました者でございまして、源兵衛と云ふ者は高山の宅で非常に世話になつた者でございます、源兵衛は尚だ子供の時分から高山の宅へは折々參つて、高山の家内を主人同樣に敬う

て居りましたが、夫れが十六の年齢に源兵衛は京都へ出まして奉公を致し、無事に主家を勤め上げまして、首尾好う別家を致しまして、今は夷川に米屋渡世を致し、上州屋と云ふ名前で、何うやら斯うやら生活が立つやうになりましたが、全くは高山の旦那のお蔭であると思ひ、是れまでは折々手紙の一通も出して居りました、彦九郎も此の源兵衛の顔は能く存じて居ります京都へ參つたら此者の厄介にならうと云ふ考へでありました、そこで先づ土地の者に道を尋ねまして、夷川の上州屋と云ふのを訪ねて參りました、來て見ると云ふと、二間半ほどの間口で表では米を商うて居ります、若い者は二人ばかりも居りまして頻りに米を踏んで居ります、亭主の源兵衛は手拭で頭部を卷きまして、米を千石篩に掛けて、ガラ〳〵篩うて居ります、折柄表の方より　彦九「許せ、源兵衛は居るか」唐突に這入つて來ましたから　源兵「ヘイ、何方様でございます、私しが亭主の源兵衛で

ございますが　彦九「オ、源兵衛、久しく會はぬな、手前も餘程變つたな　源兵「ヘイ、貴方様は　彦九「貴様は乃公を忘れたか、乃公は高山だ　源兵「オ、是れは何うも恐れ入りました、さては細谷の若旦那様でございますか、サア何うぞマア此方へお這入りを願ひたうございます」早速奥室へ通す事になり、足を洗はせ奥の室へ案内を致しました、源兵衛は家内に對ひ　源兵「彼れは國許で主人同様に致して居つた高山の若旦那である、粗相に取扱つてはならぬぞ、早速お茶の用意をせよ」と吩咐けて置きまして奥室へ參り　源兵「さて若旦那、誠に久しくお目に懸かりません、何うあそばしたのでございます、餘程貴方も御成人あそばしましたが、併しお宅は皆様方は御壯健で在らつしやいますか、　彦九「ム、ウ、お祖父様、お祖母さまは別にお變りはない、だが父上なり母上がお亡くなりになつた後は、萬事お祖母さまが宅の世帶は取締つて在らつしやる　源兵「サア其の事はお手紙で承ま

はりましたが、何から申上げて宜いか、誠にお氣の毒でございました、且那樣と云ひ、奥さまと云ひ、僅かの間に引續いて御病死をあそばしたと云ふ事でございます、して此方へは何か御用があつて入らつしやいましたか

彦九「左樣、今のところでは宅の家内のうちに何う斯うはないが、乃公はお前も知つて居る通り弟の身上であるから、將來は何處かへ分家をするのである、兄上は先づ家の跡目相續を致すのであるが、至つて稼人である

源兵「夫れからない、何しろ細谷の家を潰さぬやうに、農業の方に心を寄せて居られる、私はまた子供の自分から、ッヒ本の一つも見ると

彦九「ころから、何うも百姓の家に生れながら、農業が嫌ひだ、別に大小刀を差して往來をしたところが耻かしくない、先祖は高山遠江の守より傳はつた家に生れた此方であるから、今でも二字帶刀は御免ぢや

源兵「夫れは能く存じて居ります

彦九「夫れで萬般の事は叔父さんと相談の上で、是れまで伊勢崎の方で學問を致して

居つたが、何を云ふにも彼のやうな田舍の事で、マアチョッと世人にも名前を知られやうと、云ふ事になると、矢張り此の京都へやつて來ぬと、十分の修業が出來ぬ、實は此度來たのはなに二三年此地に逗留をして、良い師匠を取つて學問を修業を仕ようと思つて參つた譯である

彦九「就てはお前に此樣な事を云つては甚だ濟まぬが、其の逗留して修業をする間、お前の宅に乃公を置いて呉れぬか、何

源兵「へイ、夫れはお心安い事でございます、併し御覽のうぢや通り陋苦しい宅でございます、陋苦しいのをお厭ひさへなくば奥の室なり、また二階の室なり空いてございます、貴方の御都合の好い處にお在で下さいまするやう

彦九「夫れぢやア貴樣の宅へ置いて呉れるか

源兵「畏まりましてございます、彦九郎は大きに悦びまして、先づ茲で相談の上足を留める事になりましたが此の上州屋の世話に相成つて、當家の隣りの柳谷介石と云ふ先

生の許へ、弟子入りに參つた其日に、他の門弟と大議論を起し夫れが爲に途に高辻大納言の許へお出入りをすると云ふ、彦九郎一條の幸ひを得るのお話、チョッと一息いたしまして次回に

第八回

茲で忽ちのうちに相談が決まりまして、先づ彦九郎は其日から上州屋の宅の厄介になる事になりました、幸ひ二階の六疊の室が空いて居りますから、此の一室を借りまして自分の居室と定め、逗留中は萬事源兵衛の世話になる事になりました、源兵衛は家内に對して　源兵「お前、嫌な顏をするな、彼の人は癖持ちだから、立腹をさしてはならぬ、お前も厄介であらうけれども私の以前は主人同樣の人だから、當分は萬事お世話をせんければならぬ　家内「するとお前さんの御主人でございますか　源兵「然うだ、私は子供の時分は親子ながら、彼の高山樣のお宅で萬事

お世話になつたのだ、依つて其の恩返しを仕ようと思つて居る折柄、恰度好いところへお出でなさつた　家内「けれどもねえお前さん　源兵「何んだ　家内「二年も三年も食ひ倒されるのでございますか　源兵「サア、滿更食ひ倒されると云ふ事もあるまい、御自身の仮代位ねは何うでもなさるだらう、餘計な事を口出しをして困るから、何に事も私に任して置いてお呉れ」と、家内に苦情を云はさぬやうに致しまして、夫れから二階へ机の一脚も持つて來て充てがふ、彦九郎は自分は唯國を出る時持つて出ましたのは、彼の太平記の本でございます、是ればかりは肌身を放した事はない、其日から之れを披いて讀むと云ふやうな事でございます　彦九「時に源兵衛、此の京都には定めて學者も澤山あるであらうな、何んと云ふのが偉らいのだ　源兵「左樣でございますマア私しは米屋渡世をして居りまして、其方は一向素人の方でございますから、何方が御有名な方と云ふ事は知りません、私

しの直隣りにも一人先生が在らつしやいまする　彦九「ナニ、茲の宅の隣りに　源兵「左様でございます　彦九「夫れは何んと云ふ人だ、　源兵「其の先生は柳谷介石と云ふお方でございまして、能くお出で來なさるかお出來なさらぬか、夫れは知りませんが、大分御門人のある容子でございます、至つて先生は親孝行のお方でございまして、殊に皆川淇園と云ふ大先生のお弟子と云ふ事を聞いて居ります、何んでも二三十人は絶えず御門人が出入りをして在らつしやいます、今日もチョッとお噂を聞きましたが、今日は午後と夜分と二回に切りまして、輪講があると云ふ事を聞いて居ります、私しは先生とは心安くして居りますから、何んならチョッと見學の爲にお出掛けなさつたら、何樣なものでございます　彦九「イヤ、夫れは何により結構な事である、けれども勝手氣儘に參ると云ふ譯にはなるまい　源兵「左樣でございますね、先づ京都で良い先生をお見出だしになるまでは、直隣りでございますから、近くもございますし、其の介石先生の許へ一度訪問なさつたら何うです、其上貴方のお心に適ひませんければ尙だ幾らも他に先生はありますから、お取替へなさつたら宜いではございませんか　彦九「然うぢやな、夫れでは然う云ふ都合に致して、世間のお講義は濟んだる事であらうから、今夜のお講義を聞かして貰はうか　源兵「ぢやア、私しが御案内を致しませう　彦九「サア、沈として居るのも退屈であるから、何う云ふ先生かマア聞かせて貰はう　源兵「夫れでは私しはチョッと入門の印を拵へて持つて參りまして、表向き先生にお願ひ申して見ませう、然うして貴方は入らつしやいましたら、お宜しうございます、　彦九「ぢやア、然う云ふ都合にして呉れい」上州屋源兵衛は聊か

の金子を包みまして、之れを彦九郎の入門の束修と致し、夕景の事でございましたが、彦九郎は源兵衛に連れられまして、隣りの柳谷介石先生の許へやつて參りました、表は黑板塀の門構

へ、這入つた處が玄關に相成つて居りまして、先づ學者先生と云ふ家の樣へ、源兵衛は夫れへ這入つて參りますると、當家の中間に何にか申入れまする　仲間「サア〳〵夫れでは何うぞお通りなさい、今漸うお書間の講義が終つたところで、是れから夜るのお講義が始まりますまでは、餘程尙だ間もありますから、當家の御門弟衆が大勢集まつてお話をして在らつしやるから、夫れへお出でなさるが宜いから　源兵「誠に濟みませんが、夫れぢやア然うさして頂きませう」と彦九郎を伴ひまして、其の講室へ這入つて參りまするとと、大分廣やかな室でございまして、門人は二十人ばかりと云ふもの、彼方に五人、此方に三人と皆集つて、書間のお講義が濟んで尙だ夜分の講義までには、大分間があると云ふので、門人衆は種々な話をして居る、中には口を失らして威張つて議論を開始めて居る奴もある、何れも青年の連中ばかりでございます、源兵衛と彦九郎は夫れへやつて參りま

すると　源兵「若旦那、貴方は是れで少時お待ちを願ひます」彦九郎を此の講室の隅方の方へ待たして置いて、源兵衛は驅て奥室へやつて參りました、と云ふのは、當家の先生に其の願ひをする心算でございます、彦九郎は呆然と大勢の話をして居るのを隅の方で聞いて居りましたが、其のうちに稍半刻ばかりもすると、奥室から源兵衛は出掛けて參りました　彦九「何うぢやな源兵衛、先生のお目通りは叶つたか　源兵「へイ、今先生にお目に懸かりまして、貴方の事をお願ひ致しました、ところが先生は早速御承知でございました、夜分のお講義まではチョッと間もあり今はお客來でございまして、其の客人と奥室で御酒が始まつて居ります、私しもお目に懸かつて篤とお願ひを申上げましたが御承知を下さいました、貴方のお噂を申して宜しくお賴み申して置きました　彦九「然うか、夫れでは講義が始まつたら聞かして貰つても宜いな　源兵「左樣でございます、貴方は何うか是れに在

らつしやい、私しは宅に未だチョッと用事がございますから、お先へ御免を願ひます、また御講義が濟んだら宅へお歸りを願ひます　彦九「イヤ、大きに御苦勞であつた、夫れではお前は歸つて呉れるが宜い　源兵「ぢやア、左樣にさして頂きませう、何うか皆さん方宜しくお願ひ申上げます」　源兵衛は何んの事はない奉公人でも目見ねに伴れて來たやうな顏をして、皆の者に頭部を低げて、夫れなり立歸つて了つた、書生の連中は彦九郎の顏を見て「何んだ、恐ろしい可怖い顏の田舍者がやつて來た、是れは今日から入門するのであらうか、何處の者であらう」と思ひましたが、別に言葉を掛ける者もない、皆々勝手な論をして喧々云つて居ります、彦九郎は隅の方に坐つて聞いて居りましたが　○「オイ、是れからまた先生は夜るのお講義をお始めになるのだが、今日の塾間のところは何うぢやなに、先づ忘れぬやうにせんければならぬ　○「此方が結構だつたな、先づ忘れぬやうにせんければならぬ

もッと折々は忘却をするものだから、婦めのところは解らぬ、△「ムゝウ、すると中程は　○「サア、其の中程も乃公は覺ねぬ、△「ぢやア終ひは　○「終ひは全然解らぬ　△「馬鹿、其樣な事があるか、今日聞いた處が解らぬやうな事で、お前學者になれるか塚本、貴公に一昨日だつたか話をして居つた、室鳩巣翁の隨筆物を漸う今日持つて來たのぢや　塚本「成程、夫れは結構である、隨分室先生の隨筆だから好いところがあるだらう　△「ある〳〵昨夜も夫れを讀んで感心を致した、此地では當時の大儒者ほどあつて、中々好い議論が出てあるな　塚本「ハゝア、何樣な處があるな　△「乃公が感心して居るのは、彼の楠公と諸葛孔明との對論の件である、是れなどは中々尊ぶの者にはチョッと出來ぬところである　塚本「ハゝア、其樣な好い處があるか、チョッと讀んで呉れたまへ　△「ぢやア乃公が讀むから聞きたまへ」聽て正面に眞面目になつて坐り込んで、恭しく懷中から本を取り出だし

て、夫れを擴げ、彼の書生は徐々讀み始めました、他の者は前に坐り込んで、耳を傾けて居りますると

△「諸葛孔明は王佐の才、玄德三顧するに至つて始めて起つた、其の舉動極めて重いさればこそ關德張飛の上に立つて、一軍綜轄の任に當る、然も君臣の間水魚の如く、事と其の指揮を受けぬはない、國師の重みそれで定まる、處が我邦の楠廷尉ぢや、忠勇義烈千歲の下、その風を望まぬ者もないが、能く詮じ詰めると、徒らに功名を願はせた跡がある、功名を願ふが故、後醍醐帝御召させに遭うては、一も二もなく應じさせる、其の擧動極めて輕い、諸葛亮が進退擧止に千斤の重みあると、同日に論ずべきでない、さればこそ王政恢復の事成就の後、空しく尊氏義貞の下に列して、僅に河内守を授けられたに過ぎぬでないか、唐土の孔明、我邦の楠廷尉、和漢忠義の龜鑑と呼ばせられるれど、その懸隔天地の差別ぢやと云ふ事が書いてある、解つたか、君達は何う思ふか知らぬが、中々感心な事が書いてある、我々は此樣な事は眞似も出來ぬ」

隅方に熟と之れを聞いて居りました高山は、何思ひけん、ハッタとばかりに立腹いたしました、手に持つた鐵扇を握り詰め、ッカ〳〵ッと夫れへ進み出でました

彦九「アイヤ、各々、唯今の本を今一應承まはりたい」と大勢の者を睨み詰めました、其の聲は宛ながら破れ鐘の如くでございます、大きな聲で呶鳴つたものですから、大勢の者はハッと驚いた、何んだ恐ろしい可怖い顏をして、我々に議論をするのであるかと皆々目を圓くして、誰一人として何んとも云ふ者はない、すると年長の一人の者が、夫れへ出ましてあるか

彦九「拙者か、拙者は日本の臣民で、高山正之と云ふ者である、今夜初めて先生方へ入門を致した者である、唯今の御議論を今一應承まはりたい」

○「御貴殿は何方の人で此の勢ひに皆々怖れました、ところが塚本と云ふ男はチョッと年長でございます、夫れへ出まして

塚本「何も我々は議論などをして居るのでないのであります、室鳩巣先生の随筆物を讀んで居つたのであります」

彦九「然らば其の書物は何處にありますか」

塚本「御覽なさい、此の通り之れを讀んで居りましたのだが、何う仕ました」と、彦九郎の前へ差出だしました、彦九郎は手に取り上げまして、披いて少時讀んで居りましたが、何思ひけん、突然その本をべリ〳〵ッと引破つて了ひ、忽ち片傍へ投げ附けまする、と其の本の上へ對して、カアップンと痰唾を吐掛けました

彦九「腐れ儒者の分際として、斯やうな處の書物を流布なさんとする白痴漢奴が」大變な勢ひでございますから、大勢の書生達は驚いて了つた

塚本「ヤッ、貴殿は他の本を破りなさつたな」四方から夫れへ詰め寄つて參りまする

彦九「ムゥ、如何にも破つた、破つたのが惡いか、世を害する無益な書物であるから、見るも中々穢らはしいから引き破つたのだ、夫れが何うした、殊に日本の忠義の根本たる楠公と、

諸葛孔明とが同日の論になるか、馬鹿々々しい」と怒つて居りますから、塚本と云ふ者も默つて引込んで居る譯には行きません

塚本「然らば何んですか、貴殿は此の室鳩巣先生のお說には不同意と仰しやるのですか」此時四方からは大勢の書生は、何んでも塚本に加勢をして彼の田舍者を虐めて遣らうと云ふ心算で皆々先方の出ように依つては應對を仕ようと云ふ考へで、詰め寄つて參りました

○「然らば貴殿にお尋ね申すが、此の議論は何れが惡いと仰しやるのか承まはりたい

彦九「如何にも、御所望とあるなれば恐存を申さう、お身達は我が國の元弘の御代と、彼の三國の時代と同樣に見られるか、先づ其邊から承まはりたい

○「さればでござる、全く同樣とは存せぬが、正統の天子世を狹められ、國郡徒らに亂れ騷ぎ、天日是れが爲に曇り、百怪道に横行する其の狀態は、似寄つて居るではござらぬか

彦九「馬鹿な事を云はつしやい、縱ひ國難は似寄つて居るにもせよ、根

本が途ふ、元弘の御代と三國の狀態と同日の論と思はつしやるか、漢末の天下麻の如く亂れ、梟雄競ひ起るのは元弘の御時、上下の政治弛みて、志ある英傑は蜂の如く諸國に起つた其の狀態と云ふのは、能く似通ふが、高が履賣りではないか、誰も以前へ溯つて其の素姓を調べたる者はない、根本骨腦たる玄德の身分が、既に然うである、左樣な者が禮を厚くして、一代の軍師學者を招くも、誰が應と云つて直に立つ者があらうや、先づ假に拙者を孔明と見なしても、左樣な、三顧を累ぬる位ゐでは先づ御免を蒙る、玄德が幸ひに漢皇の末裔と決定したればこそ宜けれ、萬々一食せ者であつて御覽じ、孔明の地位名聲は、忽ち泥土の中に委する、我れは孔明が三度や四度で、其の招きに應じたるを遺憾とするのである」と、大變な大きな聲をして呶鳴つたから、書生等は引込んで了ひました

彦九「ところが我が朝の大楠公は左樣ではない、後醍醐天皇は、恐れ多くも一天萬乘の尊き御身を持たせられながらも、朝敵逆臣の爲めに世を狹められ、大和の笠置へ蒙塵なさせられる、實に天地は暗黑の如くにして、王朝衰微の極み、苟にも日本に生を享けて、代々忠義の血を繼いだ者縱し朝廷が招かさせられずとも、忽ち千金の身を起したるは、大楠公誠忠の致すところ、神州武士の龜鑑として、千年の後までも軍神と崇めらる、是れが孔明の如き者と同日の論になさるか、各々方、何んと返答さつしやる」此の勢ひに書生共は皆々縮み上つて了つた、グッともスッとも云へません

彦九「然るに斯かる不都合な議論を認めたる書物であるから何にの爲にも相成らざると心得、破り棄てたのである、夫れを惡いと云はつしやるか、返答をさつしやい」中々何んとも云ふ者はない、皆々後に下つて了ふと云ふやうな有樣でございます

「徐程此奴は口の達者な奴である」と思ひながら、初めの勢ひは何處へやら、眞若になつて了ひました

彦九「お身達は是れほど

に申しても返答はないのか、全然何んの事はない、木偶坊同様であるな　○「オイ、貴殿や拙者は木偶坊だとよ　△「左様か、成程、然う云はれると、チョッと斯う木偶坊のやうなところがあるな　○「馬鹿な事を云ふな、塚本、何んとか云つて呉れぬか」

彦九「ハ、ハ、何んと云うてもグッともスッとも云ひやうがない　馬鹿々々しい、斯やうな席に同席をするのも拙者は迷惑である　最早拙者は御免を蒙る、併し御議論があるなれば遠慮なしに仰しやい、何時でも参るから「イヤ夫れには及ばぬ事です、何うぞ早くお歸り下さい」正歟其様な事を云ふ奴もありますまいけれども、皆々は呆れ返り片傍に畏縮んで居りまする、此方は鐵扇を握つて、大勢の者を睨み附け　彦九「情けない、此のやうな書物を珍重にして居るやうでは、到底是等は正義な者にはならぬわい」と、其座を起つて引き退かうと致しまする時、先程から次の室で除り大きな聲でございますから、高山の議論を聞いて居りましたが、今彼れが歸らうとする時、唐紙をガラリと開け「アイヤ少時お待ち下さい」と呼び止めた者があります、彦九郎はヒョイと振り返り、見ると年齢は四十以上、目のギロリッと光つた立派な武家でございまして、其處に佇つて居りまする　彦九「アヽ、何にか拙者に御用でございるか　武家「イヤ、チョッと貴殿に申上げたい事がある、拙者は高辻大納言殿の御内に致して、山本齊宮と申す者でございる、唯今の御貴殿の御議論を承まはり、實に感心に及びましたる事である、お年齢はお若いが、何うも失禮ながら貴殿は東國のお方と心得まするが、其の東國のお方の貴殿の口から、唯今の如き御議論を承まはりまして、實に驚きました、拙者の如きは此地に住居を致し、況して王城の下に長らく居りまして、却つて朝恩の忝けない事を存ぜずして、實にお恥かしいところの次第でございます、何に卒此後は御交際を深くなし下さいますやう、其々正義の御相談を仕つり

たいと存じまする」之れを聞いたる彦九郎は、少時其の人の顔を眺めて居りましたが、豫て叔父から常々聞いて居りまするのは、此の京都の高辻大納言と仰しやるのは、中々天晴れな學者だと云ふ事でありまする、其の屋敷に奉公して居られる人から、斯く呼び止められたのであります、ツカ〳〵と後へ戻つて參り、軈て其の前にピタリと坐り、叮嚀に兩手を支へ、頭を低げまして

彦九「さては貴方に於きまして左樣な御仁でございましたか、とは知らず致し、甚はだ高聲に勝手な事を申し相濟まざる事でござる、況して高辻卿は菅原六家の隨一に致して世に有名の御家柄と承まはる、取分け當時の大納言胤長卿は晉に聞こたる慨概家と申す事、私しは國に居りまする時分から、其の御高名は承まはり居りましたが、其の高辻卿の御家臣が、態々御來際をお求め下し置かれまするとと云ふのは、私しの身に取つては願つてもない、有難き仕合せでございます、拙者事は上州新

田郡細谷の住人、高山彦九郎正之と申す者でございまするが、何うか以後願はくば、御交際を下し置かれまするやう

齊宮「是れは〳〵、早速御承知下さいまして、齊宮に於ても誠に悅ばしい事でございます、何んと高山氏、甚だ失禮な事を申しまするが今から拙者と御同道下さいませぬか、定めて貴殿の御誠忠を大納言樣がお聞きに相成つたら、嘸お悅びであらうと心得ます、お厭ひなくば拙者御同道いたさう

彦九「夫れは何うも有難い事でございます、その儀は素より拙者からお願ひ申上げるところでございます、何卒宜しくお願ひ申上げます」却つて此樣な事をしたのが緣となりまして、遂に山本齊宮と知る人となり、何んの事はない、長い馴染のやうな有樣、兩人は悅んで其儘當塾を出掛けて行つて了ひました、後に於て大勢の手輩は

△「けれども彼奴は大何んだ、蹇張り譯が分らぬぢやアないか

○「オイ、田舍學者に就分何んだね、學問が出來ると見ねるな

○「サア、

て習つたのか知らぬが、彼奴に彼あ云ふ事を聞いて見ると、ほんに然うかも知らぬと思はれるところもあるなゝけれども山本さんは彼様な田舎者を最負にするには及ばぬぢやアないか　△サア其處は彼の人もチョッと變り物だから、今から高辻卿の許へ連れて歸るのであらう、マア〳〵　邪魔物がなくなつたので、我々に取つては幸ひ、モッ其のうちに先生の御講義が始まるであらう」と、皆々種々な噂をして居ります、此方は表へ出ますると、途中ながらも種々話を致し居りましたが　齊宮「イヤ、彼の柳谷の許に集つて居る書生などゝ云ふ者は、物の道理の解つた者は一人もない、彼の介石と云ふ人は餘り毒にも藥にもならぬ人であるが、至つて親孝行であるから、拙者も交際をして居りまするが、併し貴方は何ですか、介石殿の許へ御入門なさつたのですか　彦九「イヤ、實は今日京都へ到着を致したばかりでありますゝところが今夜御講義があると云ふ事を聞きまして、知らぬ

處へ出掛けて行くのも何うも不都合と思ひ、夫れでチョッと入門の印を持つて參つて、御講義を聞かせて貰はうと思つたのであります　齊宮「併し高辻大納言樣も貴殿のやうな活潑なお方を好まれるのであります、拙者は好い鹽梅に屋敷へ參りましたら、御披露いたします　彦九「有難うございます、素より夫れのみを願つて此地へ參つたのであります、私しは成る可くなれば正義のお方々と、お附合ひを致したいと云ふ考へで居ります　齊宮「サア貴殿の御精神なれば然うであらう」話ながら漸う高辻大納言のお館へ參りまするとゝ、さて一室へ連れて這入つて、少時高山を待たして置いて、山本齊宮は奥室へ通りました、ところが恰度奥室には、高辻大納言と、其の片傍には中山愛親卿も、今日は遊びにお出でになつて在らつしやいました、何か頻りに四方山のお話をなされて居ります、すると、山本齊宮は出まして、齊宮「恐れながらチョッと申上げます、今日柳谷介石の許へ參り

ました、然るに高山彦九郎と申す若者が參り合はせ居りましたが、夫れが何んと斯やう〳〵の論を立てまして、熱心に皇室の御事を、涙に昏れて述べて居りましたところが中々先づ現今の世では得がたいところの、天晴れな正義の士であらうと思ひます、斯やうな者にお目通り仰せ付けられ、以後お出入りを仰せ付けられますれば、また追々彼れの思ふところも申上げるであらうと心得まする　高辻「成程、夫れは面白い人物である、幸ひ今日は徒然の折柄である、苦しうない、是れへ呼べ、目通りを許す」との事でございますから、彦九郎は旨い具合に參りました中々中山様だとか、高辻様の在らしやいまするお側へ然う輕々しく出て、お目通りの出來るものではありません、山本齋宮が此の男になればと見込みましたところから、其の取計ひをして連れて參りました、さて彦九郎は兩卿のお目通りへ出まするとと、遙かに下つて兩手を支へて頭を低げ　彦九「エ、恐れながら私し事は上州新田郡細谷の郷士にて、高山彦九郎正之と申す者、先祖は新田義貞の臣高山遠江守にして、其の血筋を引いたる者でございまする」と、是れから自分は國を出て京都へ參りましたる所思の大略を述べましたが、決して此の人間は詐りを述べるやうな氣色もない、そこで高辻卿は當人に就て種々と話を聞いて御覽なさると、中々云ふ事は確かなものでございます、高辻卿も天晴れ是れぞ正義の武士であると思召ました、中山卿に於て素より然う云ふ正義な御精神のお方でございますから、非常に彼れが御意に適りました、そこで中山卿は　中山「また折々は此方の館へも遊びに參るが宜い」と、其日は深夜まで樣々のお話を致して、厚く禮を述べてお暇を申上げ、上州屋源兵衛方へ歸つて參りましたが、俳し柳谷介石先生の方は、其儘にしても置かれませんから、改めまして其の翌日から、良い先生を尋ね當るまで、此の柳谷介石先生の門人とな

つて、暫くは茲に時の至るを相待つて居りましたが、其のうち高辻大納言様の許にて追々と正義の士に出會ひ交際をすると云ふ、是れが一つの緣となつて、大阪にて其頭有名な、中井竹山先生の許へ出掛けると云ふお話に相成りまするが、チヨツと一息御免を蒙りまして、次回に、

第九回

さて彦九郎は京都に於て滯在中は、柳谷先生の方へ入門は致しましたもの、、此方は何うでも宜いので、畢竟する勤王の志厚き堂上方の、其の家に仕へまする山本齋宮などとは十分に交際を結びまして、で此の人の引きを以て、其身は高辻大納言様、中山愛親卿のお目通りを致しましたのでございますから、彦九郎は非常に悅んで、間がない、隙がない、高辻様のお館へお出入りをする事に相成りました、追々當お館へお集まりになるのは、

他の人々ではない、何分御自身が斯やうな御氣象のお方でございますから、また學者のうまでは、或ひは皆川淇園、井澤蘭齋、斯う云ふ人々が集つて種々樣々のお話に相成りまする、何うぞ勤王家を選んで、此の地を往昔の如く盛んな御代に致したいと云ふ考へであります、殊に高辻卿の思召は、京學と云ふものが廢つたやうに心得ますから、學校と云ふものを設立して、夫れで諸國より門人を集め其上で勤王家を選んで事を計らうと云ふ考へでございます、是れ等の事を高山にお話をなさいまする、彦九郎は雀躍りして悅びました

彦九「誠に夫れは結構な事でございまして、何に卒一日も早くお建てになるのがお宜しうございます

高辻「だが然う性急には行かぬ事である、中々此の學寮と云ふものを建てるには大くの入費も掛かる事であるから、追々之れを募る事になし、また大阪の方よりは中井竹山も折々參つて、其の相談を致して

居るが、其方は何うだ、尚だ竹山に會つた事はないか　彦九「ハイ豫て御高名は承まはり居りまするけれども、お目通りを致した事はないのでございます　高辻「然うか、夫れでは慥が其方に中井竹山を引合はせて遣らうか　彦九「有難うございます、何うか一應御紹介を願ひたい者でございます」其の時分に大阪で中井竹山と云ふ人は有名な御仁でございまして、折々は高辻卿のお館へもお出入りをなさる、そこで是れ等の人に交つて働いたら至極結構な事であると云ふところから、中井の來るを相待つて居りまする、ところへ對して何うやら大阪から中井が見えたと云ふのでございますから、高山は早速出掛けて參り、面會の上　彦九「さて自分が此の京都に參りましたのは、願はくば一つは學問の修業を致したく、また一つには正義の方々とお交りを致したいと云ふ考へでございます、何に卒此後は宜しくお願ひ申上げます　竹山「成程、夫れはお前は結構な心掛けであります、夫れでは

また大阪の方へ來なさつた時は、何うか私の方へも立寄つて下さい　彦九「有難うございます　竹山「然うしてな、此の高辻大納言樣の仰しやるのには、將來は此地に於て一つの學察を設けて、諸國から數多の生徒を集めやうと云ふ思召である、私も此の事は至極贊成で、進んでやりたいとは思ふが、何に分一つは大變な費の掛かる事であるから、此の上からは諸國を遊説して廻つて、同志の士を集め、夫れで學察の入費を募らんければならぬのである、萬事はお前なり、また山本齋宮殿の兩名に、其方の奔走をして貰ひたい　彦九「有難うございます、私も將來は西國筋を一度は廻りたいと心得て居ります、依つて是非其方を遊説して廻る事に仕つりまする」と、茲で萬事中井竹山先生と相談を致して別れましたが、此の京都へ來まして、足掛け三ケ年と云ふもの、修業を致して居りました、其間は上州屋の宅に滯在いたし居りまするが、無代で食ひ倒すと云ふ譯にはなりません

素より自分の宅を出る時に路用の金子を持つて出たと云ふでは
なし、叔父さんから聊か貰つて出たゞけの事でございます、と
ころがお祖母さんの許へ對しては、度々手紙を出しましては、
大抵月のうちには一度づゝは彦九郎から音信をするのでございい
ます、今は京都に私しは逗留して學問の修業を致して居ります
萬事は上州屋源兵衛の許に厄介になつて居りますから、何うか
其遊のところ御承知下さいまするやうにと云ふので、通知を致
すのであります、ところが中々高山のお祖母さんは、然う源兵
衛の許に長らく厄介にさして置くと云ふ譯にはなりません、大
抵月に彼れ一人の入用は此の位ぬであらうと云ふ事を計り、其
の事は彦九郎に云はずして、上州屋の許へ食費として送ると云
ふ事になりました、源兵衛の方では、其の事に就て斷りを出し
ますると「イヤ〳〵夫れではお前に濟まぬ、何うか是れは孫の
彦九郎が逗留中の食費だけであるから、是非受けて置いて貰ひ

たい」とあります、そこで之れを戻すと云ふ譯にはなりません
から、源兵衛は受け納める事になりました、さて斯うなつて見
ると、上州屋の家内も此の手當が這入るとして見れば、別に可
怖い顏も致しません、遂に足掛け三年ばかりも逗留して居るう
ちに、大概京都の格合も分りましたし、また此地の有名な先生
方の許へも、高辻大納言樣のお引合はせに依りまして、出入り
をして交際を結ぶ事に相成つたのでございます、本人は殊の外
悅びまして、さて此の學業を建てる一件に就きましては、國々く
を遊說をして廻る事にせねばならぬ、夫れに就いて大阪へ參つ
て中井竹山先生に相談仕ようと云ふ考へ、そこで高辻樣に其の
由を申上げ　彦九「此度は大阪から西國筋を遊說をして廻りますか
ら、暫時お暇を頂きまする　高辻「イヤ、夫れは賊に御苦勞である
何に卒同志の輩を一人も餘計に募つて貰ひたいので、京都に學
業を建てると云ふ事になれば、大勢が此地に集まる事であらう

から、何うか其のやうな取計ひをして貰ひたい　彦九「委細承知仕つりました」と、高辻卿を首め其他にも別れを告げまして、お館を下りましたのは、恰度明和四年の十月中旬過ぎの事でございました、さて上州屋の許へ戻つて參りますると　彦九「オ、源兵術　源兵「イヤ、若旦那お歸り、何にか御用でございまするか　彦九「他事ではないが、お前の許に長らくの間逗留して居つて、種々厄介に相成りました、私も最う此の京都は飽いて來たから、此度は當地を出立仕ようと思ふのだ　源兵「ちやア最う何んですか、大概御修業は積みましたのですか　彦九「イヤ、尚だ積んだと云ふ譯ではないが、修業の爲め是れから大阪へ出て、大阪からまた西國筋を廻りたいと思ふのだ　源兵「左樣でございますか、貴下方の御修業なさいまするのは、我々商人には一向分らぬ事でございます、また此方へお歸りになりましたら、此の京都に御逗留中は、縱ひ若旦那、五年、十年在らつしやいませうとも構ひま

せん、斯やうな滿らぬ宅ではございまするが、御逗留下さいまするやう　彦九「イヤ、お前に然う快く云はれて見ると、誠に嬉しく思ひます、此の京都に滯在中は居心も宜かつた、此度は萬事厄介になり放しで、當家を出立しては濟まぬ　源兵「イエ、何う仕りまして、實はお宅からお手當は時々頂いて居ります、決して貴方の事に就きまして、私しの方では損を致したの、何うのと云ふ事はございません、唯及ばずながらお世話を致した事でございますから　彦九「夫れではまた都合に依ると明年は此方へ歸つて來て、厄介になる事であらう、今日はねらい好い月だから、是れから出立を致さう　源兵「エ、ッ、今日お立ちになりまするので、甚らい性急でございいまするな、何んなら明日に仕なさつたら如何です　彦九「イヤ〳〵、今からブラ〳〵行くと云ふと、夜に掛かるであらうが、其方が却つて宜い　源兵「滅相な事を仰しやいます、朝からお出でになりまして最う彼是れ未刻過ぎでございます、

も一日掛かります、途中で日が暮れて了ひます

彦九「日が暮れて

も構はぬ、乃公は國に居る時は、人に木兎と云はれたものだ、月夜にブラ〳〵歩くと云ふのも、甚らい氣持ちの快いものだ、

源兵「左様ですか、夫れでは其の支度を致しませう

彦九「イヤ、別に支度と云つて難かしい事をして貰はないでも宜いが、竹の皮に握り飯を三つほど拵へて包んで貰ひたい

源兵「畏まりました、

彦九「菜は梅干を入れて置いて呉れ」、そこで握り飯を拵へさせ、菜には梅干を入れさせ、之れを辨當として彦九郎は腰に釣下まして、遂に其日の未刻過ぎの頃、家内の者に別れを告げまする

と、其儘上州屋源兵衛の許を出立いたしました、足に任せて伏見の方へ出て參りまする

と、此の伏見からは夜船が出まするものと見ねて、頻りに船頭は呼ばゝつて居ります

船頭「サア〳〵、船が出ますから、皆さん方お乘りなさい、恰度今から出帆ますのぢや」彦九郎は考へた、夜船に乘つたところで、此の小な船で

で揺られるのも心地が悪い、寧そ陸路を取つて行く方が宜からうと思ひまして、其身は陸路を取つて、山崎の方へ出掛けて參りましたが、至つて足の健脚な人でございます、ところが今夜は十六日、何分宵の間は少し暗うございましたが、今差掛つて參りましたのは、櫻井の里、其の時分には月は高う昇つて參りました、豫て此の櫻井の里にて、楠公父子の遺跡を訪ねんと思うて居りましたが、恰度其の櫻井へやつて參りましたのでございます、此の邊は淋しい處でございました、唯彼方に松がありまして、草は蓬々と生ひ茂り、人家は稀れでございます、ところが一本の松の大木を見まして、彦九郎は考へました、此邊が御親子お別れになつた場處ではあるまいかと、能く〳〵見ると、片傍にほんのチョッと標ばかりの石が建つて居ります、其の後方の處は樹木が生ひ茂つて、誠に物凄い處であります、彦九郎は四邊を見廻して居りましたが、さては此の

松の木のある處が定めて、楠公御親子の御訣別なさつた場處かも知れない、先づ此邊にて少時休息を仕ようと云ふので、草原の中へドッサリ坐り込んで、嚮へて居りまする荷物の中から、取り出だしましたのは彼の太平記、之れを前に置きまして、楠公御親子訣別の處を、聲を張り上げて讀み始めました、其の讀んで居りまするうちも、楠公の心の裡、また正行の事を思ひまするとと、其身は胸も張り裂けるばかりの心地でありまして、思はずも感涙に咽びましたるところの容子合でございます何分自分は草深き田舎で成長いたしましたる者とは云へど、先祖は新田義貞殿の御内に致して、正義の爲に身を忘れたる者であります、彦九郎は今は主もなければ家來もない、世の中にて一本立ち、斯やうな男ではあるが、飽くまでも先祖の志を繼いで行きたいと云ふ自分の精神は、何處までも心の底には動きません、また自分も此處を毫しも動かない、事に依ると茲で徹夜

するかも知れぬ、ナニ楠ふ事はない、今宵は此處にて緩々とお話を申上げんと云ふ、嘱氣な男もあるものでございまして、先づ腰に提げて居りまする、風呂敷包みを取りまして、彼の竹の皮に包んだる握り飯をムシャ〳〵食ひ始めました、梅干を菜として漸うの事に食事を致し終りましたが「アヽ旨かつた、是れは何うやら斯らやら滿腹をした、先づ是れなれば大丈夫、今宵は楠公御父子の御靈と語り明かさん」と、再び太平記の本を手に許へ引寄せ、大聲に讀み出しました、此時後方より何者か聲あつて「是れは不思議な人におお出會ひ申す」と、大きな聲を發しました者がありますから、是れが耳に入つたものでありますから、彦九郎は大きに驚き、ハッと振り返つて眺めまする、自分の坐つて居る草原から三十間ほど向ふの方に、是れも一本の松の木がある、其の間の處に佇んで、頻りに此邊の容子を眺めて居りまするのは、立派な武家でございます、此方へ近づいて

來る容子でありますから、能く〳〵見ると、年齢は三十二三、頭髪は總髪でございまして、肩を越すばかりに毛が垂れてあります、一癖ありさうな面相、大小刀を腰に帶し、背割り羽織を着まして、紺緞子の野袴に、天鵞絨の深緑を取りましたのを着けまして、是れも手に鐵扇を握つて、彦九郎の側へ進んで參りました、之れを眺めますると、高山は毫しも油斷をせず、片傍に置いたる一刀を引き附けまして、其の武家をハツタとばかりに眺め附けました、然るに彼の總髪の武家は、漸う彦九郎の前へ來りましたが、中々落着き拂つたもので

武家「ア、失禮ながら貴殿は何方でありますか、お尋ね申したい」此の聲は何んとなく力あつて、姿勢に自と作法が具はつて居る、俳し油斷は出で來ぬ事であると思ひまして、彦九郎は左の手に一刀を握り詰め突立ち上つて此方に對ひ、チロ〳〵と顔を眺めて居りますると

武家「誠に突然聲を掛けまして無禮を致した、赦さつしやい」

彦九「イヤ、無禮は此方からも、其の儀は赦さつしやい、だが大楠公の誠忠を慕ひ、其の餘り日の暮方から茲へ參つて、此の松の邊りで御親子訣別の御跡をお訪ね申したやうな譯、また太平記の本を取り出だし、是れを讀んで樂んで居つたのでありますす、して貴殿は

武家「夫れは〳〵何より以て宜いお考へであります、拙者も大いに感心仕つりました、拙者とても今日は態々此地を慕ひ、楠公御父子は此邊に於て訣別なされし事であらうと、實は此地へ來つて容子を見て居りましたのであります、然るに其許が高聲にて太平記の楠公の御遺訓のところを讀んで居られるのを聞いて、多きに涙に昏れましたやうな譯合、全く拙者は此處へ大楠公の御靈が假に現れて、斯く姿を現はされたのではないかと思ふたのであります、斯く申す拙者は播州大久保の住人、金井權六郎と申す者でござる、何うか以後はお交り下し賜かれませうなれば、有難き仕合せに存じまする

彦九「左樣

でござるか、然らば貴殿も何かな、大楠公の誠忠をお慕ひなさる御仁でござるか、イヤ夫れは何よりも結構な事でござる、拙者は上州新田郡細谷村の産にして、高山彦九郎正之と申す者でござる、以後は何うかお見知り下し置かれまするやう」之れを聞いて金井權六郎は

權六「成程、上州新田と云へば勤王家の源の土地である、新田殿の御出生地の人とあれば、御貴殿も天晴れ正義のお方とお見受け申す、實に拙者などはお羨ましい事である、先き程から御貴殿の御容子を見て、實はお心の裡をお察し申し居ります、拙者も國を出でまして、斯く諸國を廻つて居りまするのも、何うぞ致して正義の志厚き方々にお交りを結びたいと云ふ考へにて、態々此地まで乗り込んで參りましたる事であります、依つて若しも天下に事ある時は、及ばずながらお役に立たうと云ふ考へを持つて居る者でござる、願はくば一人でも同志の輩を餘計に募りたいと云ふ望みを持つて居ります、然るに圖らず茲に於て貴殿に拜顏を得しも、正に楠公の御引合はせでありませう、拙者は此上もなく悦びと致す事であります、今宵は緩々お物語りを仕つりませう」と云ひながら、彼の武家は近邊の松の根元に腰打掛けました、高山彦九郎は先づ我が同志の者と云ふ事を聞いて、安心をして其の邊に來つて席を設けましたが

彦九「貴方は何んですか、大阪の方から此方へお出でになりましたのですか」

權六「左樣、國を出でまして中國筋を彼方此方と廻り、遂に大阪へ參り、今度は一度京都へ參らうと云ふ考へでございます」

彦九「夫れは何より結構、拙者とても斯く旅行を致すのは、一日も早く其の志ある人々とお出會ひ申し、御交際を結びたく、後日大義を計る時は夫等の人を集め、我々は眞先きに進み出でまして、御國の爲に一命を捧げ奉つらんと心得て居るのであります」

權六「夫れは何よりの事、さて貴方は、是れから何方へお出でになりますか」

彦九「左樣でござる、拙者は是れ

から大阪の方へ參らうと思ひまする 權六「成程、大阪の方へお出でになりまするとあれば、エ、定めし彼の中井竹山先生をお訪ねなさる思召でござるか 彦九「如何にも左樣でござる、中井先生は當代の大學者にして、正義の人々も數多お集めに相成つて居ると云ふ事を聞き及んで居りますから、此度は先生方をお訪ね申さうと思ひます、併し金井氏、貴殿は是れから何方の地方を御遊說になりまするか 權六「拙者は先づ東國の方を一應廻つて見ようと考へ居りまする」何も少時の間は兩人の者は種々話をして居りましたが、夜は深々と更け渡つて參りまするし、誰一人と致して往來をする者もなければ、誠に閑靜な事でございますところが此の金井と云ふ人は、中々立派な正義の武士と見えまして、互に話合つて見ると云ふと、能く話も合ひます、今宵初めて會つた者でございまするが、是れまでに長く交りをして居つた者の如くでありまして 彦九「何うか此後はお心安く願ひたい

權六「素より拙者から願ふところ、何れ私しも一度は東國から歸りましたら、暫くは京都に足を留めやうと云ふ考へでござる、彦九「成程、左樣ですか、京都へ行らつしやるなれば、彼の高辻大納言樣などのお館へお入り込みになつて、お近附になつたら貴殿の御爲めに宜しからうと思ひます 權六「夫れは素より願ふところでありますが、中々我々ごとき素浪人の分際として、高辻大納言樣のお目に懸かるなどゝは、思ひも寄らぬ事でありまする 彦九「イヤ、然う云ふ事なら拙者が添書を致しませうから、夫れを持つて高辻卿の館へ參られるが宜しい 權六「夫れは何より結構でござる、何うぞ宜しく願ひまする」と云ふので、茲に於て高山彦九郎は高辻大納言殿の家來山本齋宮へ宛て、一書を認ためる事になりましたが、何うやら此の金井權六郎と云ふ人は、天晴れ正義の人物に致して、正義の同志を募らんが爲め、東國を遊說に廻るとの事でございますから、此度の學察の一件に就

ても、斯やうな人物をお使ひに相成つたら、定めてお用に合ひませうと云ふので、其の意味を以て添書を認めたのでございます、其のうちに夜も亥刻過ぎと云ふ事になりました　彦九郎夫れでは貴方は何んですか、是れから伏見の方へ行らつしやる心算でございまするか　權六左樣、實は昨夜私しは一睡も仕ませんでして、甚だ高山氏失禮でありまするが、拙者は是れにてお暇を仕つります、また〳〵御緣があればお目に懸かる事に仕つりまして、金井權六郎は此處に於て彦九郎から添書を貰つて、是れから伏見へ參り、其夜は茲に一泊を致す事になりました、此方は彦九郎、また〳〵其處に座を占めまして、讀書を始め出しましたるところへ、思ひ掛けなくも女の泣聲、何事やらんと思うて居りまするとと、一人の娘が一生懸命となつて夫れへ駈け着けて參りまする、扨も此者は何者でございませうか、茲に高山彦九郎、娘の大難を助けると云ふの一段、チョッと一息、

第十回

高山彦九郎は金井權六郎に別れを告げまして、其の後は相も變らず、草原の中に座を占めましたが、追々と世間は鎖まつて來るうちに、月は金々冴わ渡る、是れは本を讀むには大きに都合が好い、今宵は何んでも此處にて一夜を明かさうと云ふので、其の身構へをして、また〳〵自分は本を披いて徐々讀書を始め出しました、ところへ其夜の眞夜半も廻つたでもあらうと云ふ刻限、月は冴わ渡つて白晝の如くでございます、然るに遙か向ふの方に女の泣き聲でありまするが、金切り聲を出しまして、「人殺しーイ、人殺し」と云つて、何うやら此方へ駈けて參りまする容子、偶と彦九郎は此の聲が耳に這入りましたから彦九郎何んだらう、さては女の泣き聲であるが、大方賊奴が女中を捉へて何か不都合な事でも致すのに違ひない、不埒な奴である、

是れへ參つたら助けて遣らう」と、忽ち片傍に置いたる一刀を取りましたる事でございまして、突立ち上つて其の聲のする方を眺めて居りまする、ところへ向けまして、パタ〳〵パタ〳〵駈け着けて參りましたのは、年頃十五六でもあらうと云ふ、チヨイと見ると田舍娘と云ふやうな服裝を致して居りますが、徒跣のまゝでスタ〳〵駈けて參りました、平日の事なれば此樣な淋しい處に高山が佇つて居りますれば、女も黙いて逃げる筈でございまするが、女は更に其のやうな事に頓着せず、彦九郎の側へパタ〳〵と駈けて參りました　娘「何うぞお助けあそばして下さい、人殺し〳〵」と云ひながら、高山に縋り附いた　彦九「コレ、何うしたと云ふのだ、女、何んと致したのだ　娘「ハイ、私しを殺しに參る者がございます、何うぞ後生でございますからお助けを願ひまする」と、ガタ〳〵慄へながら、兩手を合はせて頻りに助けを乞うて居ります　彦九「何んだ、手前を殺しに來る

甚だ夫れは亂暴な事をするではないか、然らば拙者の後方へ隱れて居れ　娘「有難うございまする」と、彦九郎の後方に身を潜めまして、ガタ〳〵慄へ上つて居ります、ところへ向けて少時いたしまするとと、年頃四十二三でもあらうと云ふ、一人の女でございます、女にも似合はぬ大膽にも小裾を高掀げにして居ります、八寸の出刃庖丁を携へ、之れを振り被りながら、パタ〳〵　夫れへ駈け着けて參りました　女「ヤイ、お嬢、何處へ逃げやアがつたのだ、汝れはマア其樣な處に隱れて居やアがるな、サア是れへ出ろ、親の言葉に背くところの不孝者、容赦は致さぬ」と云ひながら、彼の彦九郎の姿を眺めると、中々此の人は大兵にして、慄へ上つて居る娘を後方に隱して、大手を擴げ、殊に長やかなる一刀を手に提げて居ります、夫れですから迂乎り側へは寄れません、デロ〳〵此の躰を眺めて居りましたが、女「ヤイ、お嬢、是れへ出ろ、親の言葉に從はないところの不孝

者奴、汝れのやうな奴は殺して了つて遣る、サア是れへ來い」出刀庖丁を振り被りまして、突いて掛からんと致しますが、何んとなく彦九郎の姿を見て薄氣味が惡いから　女「モシ、お前さんは何處の人でありますの、其處を退いて下さいませ、其の娘に用事があるのですから　彦九「待てッ、何を馬鹿な事を致す」と側へ進み寄つて來る女の胸の邊りを、ドンと一突き突きまする、ヨロ〳〵と蹌踉いて、後方へバッタリ女は倒れた、顔を顰めながら漸う夫れへ起ち上りました　女「お前は何んだつて斯樣なに邪魔をするのだ、多きにお世話だ、何もお前さんに要らぬお世話を燒いて貰ふには及ばぬ、お前は飽くまでも邪魔をする心算か　彦九「知れた事を云へ、如何にも拙者は邪魔をするのだ、貴樣は此の娘を何う仕ようと云ふのだ　女「何う仕ようと斯う仕ようと、大きにお世話さんだ、其のお咲と云ふのは私の娘である、親の云ふ事を聞かぬ强情者ゆゑ殺して了はうと云ふのだ、

其處退かつしやい」と、再び勢ひ込んで飛び込まんとする奴を　彦九「待てッ、馬鹿者奴が、何たる大膽な事を致す、殊に女の身として刀物三昧を致すとは、不埒な奴である、貴樣は惡魔だな、拙者の目に騷かる上からは、決して左樣な亂暴な事はさせぬ　女「何んだと、餘計な事を大きにお世話だ、親の吩咐に背く、奴だから殺さうと云ふのだ、夫れが惡いのか、お前は何も其樣な事を構はなくつても宜い、放棄つときなさい」と、再び狂ひ猛りまして、出刀庖丁を振り被つて飛び込んで來ようと仕まするから　彦九「エ、此奴は强情な奴だ」と、彼の女の利腕をグッと掴んだ　女「アヽ痛い〳〵痛い」頻りに顏を顰めて　女「アレマア此樣な事を仕やアがつて、何うするのだ、此の手を放せ放して呉れい」と、女は頻りに身躰を跪いて居ります　彦九「イヤ放しはせぬ、斯うして遣るのだ、見て居れッ」と、突然其の女を取つて押へまして、忽ち出刀庖丁を取上げまして、彼れが手

を後方へ廻し、忽ち彼れが腰に提げて居りました手拭を取つて後手に縛り上げまして、其上片傍の松の木に縛り附ける容子でございます、女はキヤアく聲を揚げまして

女「誰か來て下さい、泥棒だ」と、大きな聲を出して居ります、娘は側にあつて可怖々々ながら烏滸々々いたして居ります

娘「アヽモシ旦那様後生でございますから、何うぞ阿母さまを助けて上げて下さいお願ひでございまする」と、手を合はして頼んで居る、彦九郎は其様な事には頓着仕ない、遂に彼の松の幹へ對して、十分に女を縛り附けて了ひました、其上尙も聲を立てゝはならぬと云ふので、娘のお咲の持つて居りました手拭を取つて、彼の女の口に猿轡を咬め確乎り後方で縛つた、斯うなると物を云ふ事が出來ません、唯身躰をモガく跪いて居りまするから、彦九郎は之れを眺めて

彦九「貴様は全躰何んと云ふ馬鹿な奴だ、何が爲に貴様の一命を取らうと致さうや、拙者は別に汝を殺さうと云ふのではない、約り汝が除り甚い心得違ひをするから、其方を改心さして遣らうと致すのである、心を改め正しきところの人間の道を履むとあれば一命は助けて遣る、さもなければ愈々手前の一命はない、此の利腕を打ち折つて了ふぞ「ムヽン、ムヽンと唸つて居りまするが、女は物を云ふ事が出來ません、娘は斯うなると、却つて己れを殺さうとした母親なれども、武家の爲に阿母さんが殺されてはならぬと思ひますから

娘「旦那様、皆な私しが惡いのでございます、是れから私しは心を入れ變へます何うぞ御勘辨下さいまするやう、阿母さんの一命をお助けあそばして下さいまするやう、お願ひ申上げます

彦九「イヤ、其方は甚だ可哀さうなものである、此方は別に手前の一命を取らうと云ふのではない、また母親を殺して了はうと云ふのでもない、唯双方の都合好く納りの附くやうにして遣らうが爲である、マア默つて見て居れ」と云ひながらも、自分は木の根に腰打掛け

まして、彼の縛り上げてある女に對つて、彦九郎は徐々人間の道と云ふものは、斯う云ふものだと云ふので說き始めました、何しろ彦九郎は眞正な事を云ふのでございますから、初めの程は中々耳へも這入らなかつた容子であるが、終ひには理窟に詰つて何んとも云ひやうがない　彦九「コリヤ、女、此の娘は自分の眞實の子ではあるまい、娘、全躰今宵お前を阿母さんが殺さうと云ふのは、何か理由がなくてはならぬ、此のやうな事を仕ようと云ふのは、何か事情があるだらうが、其の事情を一通り話を仕なさい　娘「有難うございます、私しは此の櫻井の村に住んで居りまする、百姓の作兵衛と申しまする者の娘でございまして、お咲と申します、如何にも貴方の仰しやつて下さいまする通り、此の阿母さんは私しの七歲の年齡に後妻にお出でなさいましたのでございます　彦九「然うであらう、お前を生み落した眞正の親なれば、此のやうな心得違ひを致すまい、今宵は何故に

お前を殺さうと云ふ騷動が出來たのだ、其の事情を詳しく話を仕なさい　娘「有難うございます、實は私しの村のお庄屋樣に若旦那樣がございまして、萬太郎樣と仰しやるのでございます、其のお方は何時も私しの宅へ遊びにお出でなさいまするが、至つてお酒が好きで、また宅の阿母さんもお酒は好きでございます、阿父さんは酒の方は不調法で飲みませんけれども、阿母さんと萬太郎樣とは、誠に中の好い酒友達でございます、來る度毎に何時も御酒を飲で在らつしやいまする、私しは側に居りましてはお酌の一つも致して居るのでございます、ところが今夜何のやうな話が決まりましたか存じませんが、阿母さんが私しを一室へ呼んで、ナアお咲、私の云ふ事をお前能く聞いて、今夜から彼の若旦那の萬太郎樣に、諾と云つてお寢間の伽を仕なさい、然うすれば私や宅の阿父さんの爲にも、大きに好い事になる、お前も纏て立身出世をする事になる、萬太郎樣はお前の事

を十分想つて在らつしやる事であるから、必ずお前は嫌な顔をしてはならぬ、堪断笑つて、不束な私しでございます、何うぞ宜しくお願ひ申しますと、斯う云つて若旦那様のお側にあつて一緒に寝るのだと、斯様なに仰しやるのでございます、私しも親の吩咐でございますから、縦ひ何のやうな事でも背いた事はございませんが、何うも是ればかりは、可怖くつて、可怖くつて、側へは行けぬのでございますから、阿母さん、他事の事は何事でも肯きまするが、彼の若旦那のお側へ参つて、其のやうな事を仕ますのだけは、私しは何うも能う致しません、是ればかりはお断り申しまするとて、段々く泣いて阿母さんに頼みましたゝ、ところが愈々お前は親の云ふ事を背き入れぬと云ふ事になれば、貴様は其分には棄て措けぬ、一旦私が若旦那に受け合つた事であるから、今更娘のお咲が嫌だと云ふからと云つて、貴方を嫌ひましてお側へ参らぬと云ふやうな事は、私しの口から

は何うも云へぬ、然うなれば仕方がないから、お前の首なりと斬つて若旦那の側へ出して、申譯をせんければならぬ、私の云ふ事を肯かねば仕方がない、お前を殺して丁ふと、斯やうに仰しやいまするところから、何うぞ阿母さん、夫れだけは後生ですからお助けを願ひまするとゝ、段々くとお詫をして居りましたが、エゝ、此奴不孝者奴が仰しやいまして、阿母さんは突然出刀を取つて、私にお對ひになりましたが、さも怖ろしい有様ですから、私は可怖くつてなりません、そこで裏口から逃げ出しまして、此處まで逃て参つたのでございます、親の吩咐でございますから、他の事になればいまする何のやうな無理な事でも聞きますが何うも是ればかりは阿母さまにお断りをして下さいまするやうに上成る可くなれば母の一命をお助け下さいませ」と、ワッと泣き伏して丁ひました、高山彦九郎は之れを聞いて彦九「ムゝウ、左様か、然らば其方は夫れにて見て居れ」女

の側へ參りますると、チッと彼れの顔を睨み附けました　彦九「何うぢや、女、乃公に然うされた上は口も利けず、また手足も自由にはならぬが、定めて耳は聞ねる事であらう、我が云ふ事を能く聞けよ」と、ハッとばかりに睨め附けました、其の怖ろしき有樣に、彼の女は豆鐵砲を喰つた鳩同樣、目ばかりパチ〳〵さして居りまする　彦九「貴樣は物の哀れと云ふ事を知らぬ奴だ、畜生でも親子の情と云ふものは知つて居るのである、燒野の雉子夜の鶴、貴樣は人間に生を受けて居ながらも、其の所爲は畜生にも劣つた奴である、何うしても此の娘の身に及を當てると云ふのは、何んたる無法な事である、娘を賣りものにして己れの腹を肥やさんとする、夫れで人間の道が守つて行けると思ふか、先程から聞いて居れば、全くは肉身を分けたる子ではないと云ふ是れが現在腹を痛めたる手前の子なれば何うする、豈夫夫のやうな無法な事はすまい、其の愛情と云ふものを知らぬか

世の中の義理と云ふ事を思つて見ろ、義理を忘れるやうな心では、到底世の中を渡つて行く事は出來ない」と、段々異見を致しまするとと、女はグッともスッとも答へやうがない、唯手足を睨いて居りまする、ところへ、「お芳やーイ、お咲やーイ」と、遙か向ふの方から、兩人の名前を呼び立てまして、何うやら此方へやつて參りまする者がありまする、お咲は之れを聞きまして

お咲「アヽ、彼れは私しの阿父さんでございます　彦九「オヽ、左樣か然らばお前の父か　お咲「ハイ……　阿父さんではございませんか　老爺「オヽお咲か、能うマアお前茲に居て呉れた、乃公は何うなつたのであらうかと、漸うの事に後を慕うて是れまでやつて來たのだが、阿母さんは何うしたのだ」正與茲に縛られて居ると云ふ事も、親父に對つて云ひ難いものと見ねまして、彼の松の枝の處に縛り附けてありまする、母親の方へ指しを致しまして、彼れに在らつしやいまするとと知らせた、ところが親父の作兵衛と

云ふ男は、ヒョイと此の躰を見て大いに憤りました　作兵「オヤ大変な事を仕やアがつたではないか、ヤイ、汝れはマア乃公の嬶アを何んで縛りやアがつた」　彦九郎は何んにも云はない、此の老爺の有様を見て居りましたが、唐突に　彦九「馬鹿者奴がッ」と大きな聲を出して呶鳴つたものですから、作兵衛はハッと驚いて、忽ち其處へ平倒つて了ひましたが、中々迂乎り側へは寄れません、唯目ばかりパチ〳〵させて、是れも彦九郎の容子を見て居ります、彦九郎は娘の顔を眺めまして　彦九「お咲とやら、先づお前は心配仕なさるな、全く私が固く納めて遣るからお咲」ハイ、有難うございます」　先程からお芳と云ふ者の持つて居りました出刀庖丁が、片傍に投り附けてありましたのを拾ひ上げまして、作兵衛と云ふ親父の方に對ひまして　彦九「其方は此者の親父であるか、此の女は貴様の女房であるか　作兵「ハイ、左様でございます　彦九「然らば兩人とも何處へも逃るな、逃ると云ふと

踏み殺すぞ」　大変な勢ひでございまして、出刀庖丁を以て彼のお芳と云ふ者を縛つてある、手拭を切つて解いて遣り、其處へ作兵衛と兩人を並べて坐らせ　彦九「實は先程から斯やう〳〵の譯合であつて乃公が娘を助けて遣つたのだ、何んと人間の情と云ふものを、お前達は知つて居るか、大躰このお芳と云ふ女は亂暴だ、餘り無法な致方であるから、手足が動かぬやうに、其の異見の爲に乃公が縛つたのだが、ところで此の娘は何んと云つて居る、自分は母親の爲に殺されやうとして、危ないところを是れまで逃げて參つて、漸う我が身の危ない一命を助かつたのを悦んで、其の時私が惡うございました、何うぞ後生でございますから、阿母さんの一命を助けて下さいと云ふて居る、實に感心な娘である、貴様は此の娘を可愛くはないのか、現在手前は女房の尻に布かれて居る、斯う云ふ家庭の有様であるから、此の女が、飽くまでも増長を致すのだ　作兵「ヘイ、イヤ何うも恐れ入

りました、實は私しの宅へお名主さんの若旦那でございまするが、何時もお出でになりまするとゝ種々お世話を下さいまする夫れですからお芳の申しまするには宅の娘を彼の若旦那のお妾に差上げて置いたら、また宅も儲かり我々の爲になる事である、然う仕ませう、と云はれて見れば、私しも嬉と云ふ譯にはなりません、其樣ならお前は娘の得心の行くやうに云つて聞かせなさいと云ひ置いて、今日は私しは他へ出まして今しがた宅へ立歸つて參りまするとゝ何んだか宅中は取散らしてあります、若旦那も逃て歸つたか其處等には居られませず、女房も居なければ、娘も居ない、是れは何うなつたのであらうと驚きながらも、漸う是れまで捜しに參りましたが、さては此のお芳が娘を殺さうと致したのでございまするか、豈夫れは正氣の沙汰ではございますまい、アゝ旦那樣、有難うございます、畢竟する、此處に貴方がお在でであそばしましたればこそ、家内なり

娘の一命が助かりました、お芳、貴樣も好い加減に亂暴を止めて呉れたら何うだ、マア旦那からお話を聞いて見ると、お前は娘を殺さうとしたのに、娘は阿母さんの一命を助けて下さいと云ふたのではないか、是れは親子の情愛、些とはお咲を不憫に思つて遺つて呉れい、繼子と云ふものは夫れほどに憎いものであるか、何も彼の若旦那に娘を差上げぬからと云つて、宅の生活が附かぬと云ふではなし、年頃の來つた娘の事だから、何方へなりとも嫁入りをさすと云ふのは、是れが兩親の役だ、お前は今尚そのやうな丁稚で居ると云ふのは、畢竟する以前は仲居の一つも勤めて居た者ゆゑ、其樣な無法な事を云ふのであらうサア茲へ出て此の旦那樣にチャッとお詫びをさつしやい、親子三人が唯中好う暮して行けば、別に何も間違つた事はないのではないか」と、至つて此の作兵衛は朴訥人でございますから、涙に昏れて異見を致しました、女房のお芳も先程から首を低垂

れまして、大地に両手を支へて居りましたが　お芳「アヽ旦那様、恐れ入りました、成程、私しが重々悪うございました、ッと私しも然うして置けば少しでも宅も楽になるし、また若旦那の心に従うて置けば、若かお名主さんの宅へ嫁附くやうな事になりますれば、此者の出世にもなると思ひまして、勧めましたのでございます、今聞いて居ますれば、私しを助けて呉れいと云ふアヽお前は能く親切に云つて呉れた、成程、今熟々と考へて見ると、此のやうな怖ろしい了簡になりましたのも、私しに悪魔がさして居りましたのでございます、如何にも是れから改心を致しまして、屹度此後は斯やうな乱暴な事は致しません、何うぞ若旦那様、お助けあそばして下さいまするやう　彦九「ムヽウ、貴様は愈々改心をするか　お芳「ハイ、致します、最う是れからは決して乱暴な事は仕つりません　彦九「成程、改心を致すとして見れば、異見をした此方も甲斐があつて悦ばしい、必ず此後は心

得違ひをするな、年頃に至つた娘であれば、然るべき宅へ縁を求めて嫁附けて遣ると云ふのが、是れが親の役である、決して娘を遊女賣女に等しき業躰をさせる事はならぬぞ　作兵「有難うございます、實に先刻から旦那様の顔を見て居りましたが、私しは是れまで來まして、初めに馬鹿者奴がと、彼の大きな聲を出して私しをお睨みなさつた時は、私しも生れて腑の緒を落して　から今日までに、此様な可怖い思ひを致した事はございません　途方もない旦那様は聲の大きい可怖いお方であると思ひました　併し斯う云はれて見ますると、決して間違つた事を仰しやるのではございません、皆々我々夫婦の爲を思つて云つて下さいまするので、私し等の爲には大きに一命の恩人、何うぞ今宵は夜も更けて居りますから、此邊は何處へ泊まる處もございません、何んなら私しの宅へお出で下さいまして、今宵一夜はお明しあそばしては如何でございます　彦九「イヤ、乃公は別に今宵は宿